

書 評

Kate Colquhoun, “*The Busiest Man in England*”: *A Life of Joseph Paxton, Gardener, Architect & Victorian Visionary* (Boston: David R. Godine, 2006)

松村 昌家

20数年前、ある必要からジョゼフ・パクストンの伝記を探したところが、まとまったものがなくて不便を痛感したことがあった。その意味でKate Colquhounの“*The Busiest Man*”は、私にとって待望の書であり、1851年のロンドン万博と水晶宮、ガラス建築、イギリスにおける園芸学などに関心を持つ研究者にとって、利用価値の高い本である。

気がついてみると、本書は *A Thing in Disguise: The Visionary Life of Joseph Paxton* という標題で、2003年にロンドンの Harp Collins Publishers から出版され、改訂・リセット版として標記のボストンの出版社から出版されている。昨年に書評を書くはずであったが、やむを得ない事情により、1年遅れてしまった。

“*The Busiest Man in England*” ——私はまずこの標題にひきつけられた。まさにパクストンの生涯をあらわすのにぴったりの綽名だといえよう。だが気になることがある。著者コフーンによると、パクストンを「イングランド一の忙しい男」と名づけたのはチャールズ・ディケンズだということだが、実はそれは事実を取り違えているからである。

ディケンズ主宰の『ハウスホールド・ワーズ』第43号（1851年1月18日）の巻頭に載っている“*The Private History of the Palace of Glass*”には、確かに“Mr. Paxton (who is one of the busiest men in England——whose very leisure would kill a man of fashion with its hard work)...” (p.387) というくだりがある。

しかし、当時にあつては「ガラス宮殿」、すなわち水晶宮の設計者として

のバクストン論の白眉ともいべきこの記事を書いたのは、ディケンズではなくて、彼の編集補佐役のウィリアム・ヘンリー・ウィリスであった。本書が改訂版として刊行されており、A.N.ウィルソンや、ジョン・ケアリをはじめ、数々のイギリスの批評家から賛辞が寄せられているだけに、このミスを見過ごすわけにはいかない。しかしこれは珠に瑕のようなもので、バクストン伝としての本書の内容的価値を損なうものではない。

バクストンといえば、1851年のロンドン万博を通じて世界的に有名になった水晶宮の生みの親として知られるが、もし彼が園芸学興隆の時流に乗ることができていなかったなら、彼はその栄光に与ることはあり得なかったかもしれない。本書第I部（第1章―第13章）では、園芸畑に入って純然たるセルフ・ヘルプの道を歩み始めたバクストンが、イギリス屈指の大貴族、第6代デヴォンシャー公爵に引き立てられるようになるまでの出世の道筋が描かれている。イギリス園芸協会（のちに^{ロイヤル}王立がつく）が創設されたのは1804年、バクストンが生まれた翌年である。以後奇しくも彼の人生は、この園芸の時代と密接に関わって形成されることになる。

バクストンが20歳で自立のために職を得たのは、当時チジックにあった園芸協会庭園であった。第6代デヴォンシャー公爵の所領で、下働きの庭師としてのキャリア3年目にして、彼は一挙にチャッツワース・ハウスの庭園管理人に登用されたのである。

ちょうどダーウィンがガラパゴス諸島の探検をはじめた1835年頃のイングランドでは、園芸がブームを呼び、インド、ビルマ（ミャンマー）、南米などでの珍种植物のハンティングや採集熱が高まっていた。園芸造園に関する定期行物が流行し、デヴォンシャー公爵もまた、ガーデニングに関するオブセッションに取りつかれていたのである。

そんななかで、チャッツワース・ハウスの有能な庭師のひとり、ジョン・ギブソンがインドに渡り、50種に余る珍種のランを採集して持ち帰った。「ランは、まじめな意味でのステータス・シンボル」として尊重されていた。採集されたランを育てるためには、温室が必要となる。そして、バクストンによる温室の建設が始まり、1840年には、その最大の傑作ともいべき総ガラス張りの大温室（the Great Stove）が誕生するのである。キュー国立植物園のパーム・ハウスより4年前のことで、リヴァプールライム・ストリート駅（1838年）やロンドンのユーストン・ターミナル（1839年）よりも大きな、世界最大のガラス建造物であった。「この大温室は、多くの種類

の花ばなの神殿というべく、それが満たされるにつれて名声が高まり、パクストンの名前がそこに大きく刻まれた」(p.99)。

本書第II部(第15章—第20章)は、1840年にサー・ロバート・ジョンパークという地理学者が、熱帯南米の英領ギアナで発見された鬼バス(彼はそれをヴィクトリア・レギアと名づけた)の種子を、ヴィクトリア女王に献上すると同時にデヴォンシャー公に贈る話ではじまる。

この鬼バスの種子の栽培をめぐる、パクストンとキュー国立植物園長のウィリアム・フカーとのあいだに競争が展開された。

何度も試行錯誤を重ねた末、パクストンはチャッツワスの大温室に、水車装置つきの水槽を取り付けて、鬼バス成長の自然条件の整った環境を作り出した。そして1849年に、彼は遂に人工栽培によって「ヴィクトリア・レギア」に花を咲かせるのに成功したのである。

これはもちろん、イギリス園芸史上画期的な出来事であったが、パクストンの伝記に照らして重要なのは、大温室の建造と鬼バス栽培の成功の経験が、彼の水晶宮設計のインスピレーション源となったということである。

パクストンの設計によってハイド・パークに建てられた水晶宮は、万博終了後にシドナムに移築され、規模を広げ装いを新たにして「民衆の宮殿」として生まれ変わった。

その点でまず注目すべきは、ウィンター・ガーデンと膨大な数の噴水群だが、著者のコフーンはパクストンのコックニーをまねて、「“hexinct hani-mals”で満たされた、世界最初の恐竜テーマ・パーク」が造られたこと(p.201)を重視している。それらの「絶滅した動物たち」は、古生物学者として有名なリチャード・オーウェンの指導のもと、彫刻家ベンジャミン・ウォータハウスによって実物大に再現されて、シドナム水晶宮の名物の一つとなった。

噴水群やウィンター・ガーデンについても、コフーンがいうように、パクストンはハイド・パークの水晶宮のときとは違って、彼の園芸と創造の能力を存分に発揮することによって、大傑作を生みだし、「民衆の心をひきつけることに」成功したのである。

噴水群を造る際のパクストンの頭には、ヴェルサイユ宮殿の噴水の向こうを張って、という野心があったというのが定説になっているが、もう一つ付記しておくべきことがある。彼はデヴォンシャー公の指示を受けて、チャッツワス庭園のキャナル・ポンドに「皇帝噴水」^{エンペラファンテン}を建てた実績があつ

たということである。公爵がかねてから親交のあったロシア皇帝ニコライ一世をチャッツワスに迎えるために造られたもので、約80メートルの高さに水を噴き上げる、当時としては世界最高の重力送りの噴水であった（但し皇帝の来訪は実現しなかった）。

1855年、パクストンはコヴェントリ選出の国会議員となり、一転換期を迎える。

一介の下級庭師から国会議員へ。まさにヴィクトリア時代のサクセス・ストーリーのヒーローを地で行ったわけだが、その間に彼とデヴォンシャー公爵とのあいだの関係にも次第に大きな変化が生じていた。両者はもはや雇い主と雇われの庭師の関係ではなくなっていた。

パクストンは、チャッツワスの管理人であり、公爵のエージェントであるだけでなく、「パチェラー・デューク」（デヴォンシャー公）の「フレンド」としてすっかり頼られる存在となっていたのである。両者の“friendship”について語る著者の文脈からは、パクストンのいないデヴォンシャー公の人生はあり得なくなったというニュアンスが読み取れる。そのように深まった公爵との個人的な絆、チャッツワスの管理、水晶宮ウィンター・ガーデンのディレクターとしての責任、鉄道プロモーター、投資家、そして国会議員としての活動——これだけでも「イングランド一忙しい男」の面目躍如たるものがあるといえよう。

コフーンは、パクストンの人生を、マシュー・アーノルドのいう「病的な急ぎ性」（sick hurry）の典型例としてあげているが、その生き方は、彼の家庭にどのように響いたのかも、見る必要がある問題だ。

この点で彼の妻セアラは、“Women’s Mission”に徹した、模範的なヴィクトリア朝の女として大きくクローズアップされている。彼女は全力をつくして家庭を守り、夫の理解に努め、夫の代理を務めるのに最善をつくした。しかし、それも限度がある。息子のジョージは不良少年と化し、年とともに手に負えなくなる。4人の娘たちにとっても幸せな家庭でなかった。

本書第Ⅲ部（第21章－第25章）は、パクストンが国会に進出してから死（1865）に至るまでの10年間に当てられている。

その10年間における彼の主な実績のうちまずあげられるべきは、国会議員生活最初の国家的仕事として、水晶宮建設のときに雇用した土木労務者たちを動員して、「軍属労務団」を組織して、クリミア戦争の戦場へ送りこんだことである。英軍騎兵隊の突撃で有名なバラクラヴァとセヴァストポ

りのあいだに道路をつけて、戦況を有利に導いた功績があったのである。

つづいて彼は、悪名高い「ロンドンの大悪臭」問題の解決に乗り出した。日々テムズ川に流れこむ下水汚物から発散する悪臭が1858年の夏には特にひどく、議事堂内まで襲ってきて、「文字どおり国民の代表者たちの鼻にまで達する」状態が連日つづいた。

そこで1859年にはパクストンの動議により、テムズ川のエンバンクメント建設にむけての特別委員会が組織され、彼はその委員長として工事の計画を練り、予算案をつくって国会に提示した。結果として、1862年に認可が下り、サー・ジョゼフ・バザルジットによってテムズ川の北岸にヴィクトリア・エンバンクメントが、南岸にはアルバート・エンバンクメントが建設されることになる。前者の工事が始まったのは1864年、そして後者は1866年。ともに1870年に完成するのだが、パクストンは1865年6月8日にシドナムのロックヒルズで61年の生涯を終えた。死因は心臓と肝臓の機能不全と診断されたが、『パンチ』テーブル仲間のヘンリー・シルヴァーは、日記に“More fatal overwork!”と書き記していたということである。

書 評

Elizabeth Buettner, *Empire Families : Britons and Late Imperial India* (Oxford Up, 2004)

橋本 楨矩

英国とインドの関係は東インド会社の時代から1947年のインド独立まで連綿として続いてきた。いやポストコロニアル時代の今日も続いていると言った方が正確である。英国人のインド体験は公文報告書、歴史記録、地誌、年代記、日誌、旅行記、書簡、回想録、自伝、伝記、写真集、小説などあらゆる記録の形で残っている。これらの資料を渉猟して書かれた交流史は当然ながら膨大な量を誇っている。

アングロ・インディアンと呼ばれた在インド英国人（著者はブリティッシュ・インディアンという言葉を用いている。アングロ・インディアンは現在では混血の人々を指すからである）は特殊な社会集団を形成していた。彼らの中で支配者としてインド統治に携わっていた男性たちについての研究書は Michael Edwards, *Glorious Sahibs* (1969)、Philip Mason, *The Men Who Ruled India* (1985)、David Gilmour, *The Ruling Caste* (2005) など枚挙にいとまがない。しかしこれらインドを支配した男性たちの伴走者であった女性と子たちに焦点を当てた研究書となると Margaret MacMillan, *Women of the Raj* (1988) を挙げればことたりる。

本書の特徴と斬新さは三点ある。第一に著者は英国のみならずインドのコレッジやスクールの図書館あるいはアーカイヴに眠っていた回想録や書簡集を第一資料として利用している点である。第二に英国とインドを往還したアングロ・インディアン家族の生活記録を研究の対象としている。そのために子供を含むアングロ・インディアンの家族像が鮮明に描かれ、帝国主義批判の陰に隠れて見えなかった彼らの生活の細部、現代のわれわれにも共通する悲喜こもごもの生活が活写されている点である。第三にイン

ドを去った後の彼らの行く末である。移民ではなかった彼らはインドでの底上げされた生活から格下げされた英国での退職後の生活をどのように過ごしたかが詳細に報告されている点である。

アングロ・インディアンはトレヴェリアン家に典型的にみられるように何世代にも亘りインドに関係してきた家系の者が多く、英国本土とは異なるエトスを持つ特殊な社会集団を形成していた。親の世代からインドに住んだキプリングなどもアングロ・インディアンの作家であるという観点から考察したほうがよい。彼らの多くはインドの文化や美術を理解せず、読書さえ精神を軟弱にするものとして排するような実務的精神の持ち主が多かった。インドに滞在しながらも支配者としての観点からのみインドを見るかれらにとってインドの驚異は脅威に等しいものだった。インド人を締め出すクラブ生活に唯一の社交を見出していた彼らはインドの広大な大地に浮かぶ孤島のような存在であったと言える。特にスエズ運河開通後はインドに行く女性の数が増えて、彼女たちが英国人男性とインド社会とのあいだに立ちはだかり「豊満なインド女性のセクシャリティの誘惑から」白人男性を遠ざけたというのが定説である。もうひとつの英国人とインド人の疎遠の原因はいうまでもなく1857年インド大反乱後の統治姿勢の変化である。彼らはインド人社会から距離を置くことを信条とした。さらに当時のアングロ・インディアン社会では、人種差別思想と英国的階級社会観が結託して独特のカースト制が完成していた。彼らの中核をなす行政官たちは、英国の中産階級出身者たちであったが、インドでは支配階級に格上げされたエリートとしての矜持に生きがいを見出していた。インドに到着した新参の英国人はアングロ・インディアン社会の他に生きる場は皆無であり、そこからの逸脱はほとんど不可能だったのである。

Buettnerはこのような社会環境の中で家庭を持ち、子供を養育していったアングロ・インディアンたちの記録を豊富なイラストを挿しはさみながら解説している。第一章では子供たちがこうむる身体的および文化的汚染の問題が取り上げられている。言うまでも無く彼らの養育を任されていたインド人乳母や召使からの身体的汚染とは、熱帯特有のデング熱やコレラのような病原菌の伝染である。文化的汚染の最たるものは、子供の英語の発音がインド諸語の影響を受けた「チャーチャー・イングリッシュ」に墮す危険

である。これらの汚染を避けるために親たちは早期に子供たち（特に男子）を7歳までに教育を受けさせるために英国に送った。第二章はインドのヒル・ステーションに創られた混血児のための学校に経済的理由などにより、やむなく子供を送る場合に生じる汚染や将来予想される不利益が取り上げられている。アングロ・インディアン社会には、ブリトン（彼らはインドと英国を往還する非移住者）、定住ヨーロッパ人（オランダ人やポルトガル人の子孫でインドに定住している人々。しかし時に混血の可能性が疑われている）、ユーラシアン（白人とインド人の混血の人々）の人種差別的序列があり、ブリトンは自分の子孫がこの序列を滑り落ちていく危険を回避しようとしたのである。第三章と第四章では英国に帰国した後の子供の教育環境およびインドにとどまった両親との離別の影響が論じられ、キプリングの事例が詳細に取り上げられている。彼の「めえーめえー、黒い羊さん」はインドから6歳で英国に送られた悲劇の体験をほぼ事実にして書いたものである。第五章では両親がインドから帰国した後の家族の再形成および退職したアングロ・インディアンの英国社会での位置づけ、特に彼ら独自のコロニーを「英国のカルカタ」と呼ばれたチェルテナムなどに形成する歴史的プロセスなどが豊富な資料に基づいて詳細に論じられている。またインドで育ち英国になじめなかった子供たちが、やがて再びインドへと渡っていく姿が、インド警察に勤務したアデルバート・タルボットと彼の子供たちとの往復書簡から報告されている。むろん著者は文学にも視線を向けて、オーウェルの『空気を求めて』に見られるインド帰りのアングロ・インディアンの閉塞した貧窮の生活に言及することも忘れていない。ロンドン留学時にガンディーが下宿したのはベイズウォーターの退職アングロ・インディアンの家であった。彼らが乏しい年金の足しにインド人学生を下宿させ、後のインド独立運動家を育てたというのも歴史の皮肉であろう。また特筆に価するのは、英国での格下げされた生活を見限って、多くの使用人などを雇用できる「コロニアル・スタイル」の生活を求めてアフリカのケニアなどに移住した人々も存在したことである。

本書を読む楽しみは、ひとつには上に記したようなアングロ・インディアンの家族生活を19世紀の中葉から20世紀の半ばまで通覧できることにある。しかし事例として取り上げられている多数に上る家族の物語のなかに

は伝記小説を読むような楽しみも隠れている。幼年時代のインドの思い出を *Two under the Indian Sun* (1966) という自伝にしたための Godden 姉妹(彼女らは小説家である)の足跡の紹介は「植民地主義をローカライズする」という本書のもうひとつの狙いに最適のトピックである。

インド独立から四半世紀の間は、帝国主義への批判と反省が英国社会に浸透して、インド支配に加担したアングロ・インディアンへのまなざしも冷たかった。しかし1970年代になると多くの回顧録が出版されるようになると同時に M. M. Kaye, *The Far Pavilions* (1987) や Ruth Praver Jhabvala, *Heat and Dust* (1975) などが映画化されて、インド統治をセンチメンタルな回顧の霧の中で再評価する動きが出てきた。(サルマン・ラシュディーはこのような動向に対して‘Outside the Whale’のなかで警鐘を鳴らしている)。第二次大戦後に BBC が *Empire* のかわりに *Raj* という18世紀のオリエンタリストが好みそうな言葉を使用し始めたことも、英国のインド統治の負の遺産を覆い隠そうとするセンチメンタルな回顧の霧を濃くしたと言えよう。

サイドのオリエンタリズムあるいはホーミ・K. バーバの批評理論が帝国主義批判の論理の組み立てに於いてポスト/コロニアル文学の読み直しに寄与することが多かったことは既知の事実であるが、理論の常として英国統治時代をインドで生きた人々の生活と意見の細部を捨象しがちであることもこれまた真実である。

本書はセンチメンタルな回顧の記録に墮すことなく、時代を生きた人々の生の声を採録しつつ事実を追求した研究書として、1765年から1856年までの英国人のインド体験を日誌と回想記を資料として精査した Ketaki Kushari Dyson, *A Various Universe* (2002) を補完する優れた業績である。

書 評

Dinah Birch, *Our Victorian Education*
(Blackwell, 2008)

香川 せつ子

「教育立国」というやや古めかしい響きのスローガンが、21世紀の日本の文部行政の看板に据えられた。グローバル化の進展が経済競争を支える人的資本の増強を要請し、業績主義や市場原理の導入によって戦後の公教育制度は大きな試練に晒されている。イギリスにおいても、サッチャー政権による1988年教育改革法の原理と精神は労働党ブレア政権に引き継がれ、教育予算の増加と学力テストを媒介とする学校の業績評価とをワンセットにした政策が推進されてきた。一連の改革は、一方で学力測定値の上昇を実現したが、他方では学校、教師、子どもたちへの圧力を強め、反発と格差の拡大によって教育現場は混乱し、国民の間に教育への不信が広がりつつある。時代や国を問わず、公教育が抱える問題は厄介である。英文学者バーチが本書を執筆した背景には、曲り角にあるイギリス教育の現実がある。教育という人間形成に直接かかわる営みに対して、人間の内面の洞察を探究し表現する文学や文学者はいかなるスタンスをとるべきか、それについての問題提起を試みたのが本書である。ヴィクトリア時代の教育を論じながらも、本書の視点はすぐれて今日的であり、論争的な内容を含んでいる。

著者バーチは、ジョン・ラスキンの研究者として、近年では *Ruskin and Gender* (Palgrave, 2002) 等の書を公刊している。19世紀の詩や小説、評伝などジャンルは広く、タイムズ紙等の書評欄で活躍する。2006年にリヴァプール大学で開催された British Association for Victorian Studies の大会では企画運営の中心となった。松村昌家氏の参加報告が「日本ヴィクトリア朝文化研究会ニューズレター第4号」に掲載されているが、それによれば大

会の全体テーマは“Victorian Cultures in Conflict”だったとあり、ヴィクトリア時代の教育をめぐる対立・葛藤を扱う本書の輪郭は、この時すでに描かれていたとみうけられる。

著者は、本書の方法的特色を、「文学的」であると同時に「歴史的」であると規定している。しかし、著者の目標は、ヴィクトリア時代の教育全般を俯瞰することにも、またこの時代の教育と文学とについて包括的に論じることにもおかれていない。タイトルを見れば、‘Victorian Education’の前に‘Our’がおかれていることがミソである。著者のねらいは、教育のあり方をめぐるヴィクトリア時代人と現代人との対話の実現であり、この時代の知識人が教育に傾けた情熱と信頼を現代のイギリスに蘇らせることにある。バーチは、ヴィクトリア時代を生きた文学者たち——カーライル、ラスキン、ディケンズ、ブロンテ、エリオットなど多彩な面々——が、教育の功利主義への傾斜や国家による統制に抵抗し、「精神の自由」「感性の尊重」を訴えた諸々の声を、作品のなかから取り出して紹介する。従来の教育史では、せいぜい論旨の彩りとして登場するに過ぎなかった文学作品が、本書では主役となり、それを軸とする教育思想史が紡ぎだされる。教育史研究にとって、こうした視点と切り口は斬新であり刺激的である。

序章で、著者は、ヴィクトリア時代と現代との共通性を指摘する。現代のブレアと同様に、ヴィクトリア時代の政治的指導者は、教育のなかに社会進歩と国家繁栄を実現する鍵を見いだそうとした。エリート養成から労働者階級の教育に至るまで、教育改革の潮流はかつてない勢いで広がったが、公教育制度はその始まりの時点から現代の教育問題に通底する矛盾を抱え込んでいた。自由と統制、個性と規格化、平等と競争、公平と差別など、諸々の二項対立が存在し、「誰が、何を、誰に対して、どう教育すべきか」について統一した見解に達することはなく、国民全体がひとつの教育制度の下に教育されることもなかった。分裂の基底にあるのは、宗教、ジェンダー、階級の差異であり、バーチは、これらを分析軸として、政治家と文学者の教育論を対比させつつ検討を進める。

第1章では、公教育と文学者との間の「何を教育すべきか」をめぐる衝突の大まかな見取り図が示される。産業に役立つ人材の育成と国民統合を目的に創始された公教育制度が、知識の普及と同時に子どもの規律化を推進

したのに対して、その功利主義、画一主義的性格が子どもの個性の圧殺や精神的退廃をもたらすことを危惧したのが、当時の文学者であった。パーチによれば、彼らの関心の背後には予想される読者層の拡大変化に対する職業的関心が存在したのだが、より大きな原動力は、権威が低下する宗教にかわって、文学こそが国民の「倫理システム」の構築者であるとする使命感であった。ウィリアム・ワーズワースは、「情報と知識の普及」を標榜する潮流に抵抗して、共感と欲望と悲哀など「感情の伝達」の重要性を訴え、またトマス・カーライルは、「知識は我々が見たものについて語るに過ぎない」と主知主義を批判し、想像力、情緒、精神性が人間性の陶冶にとって不可欠であることを主張した。しかし、現実の公教育制度は、1860年代のロバート・ロウによる「出来高払い制制度」の導入が象徴するように、競争原理と成果主義への傾斜を強めていく。パーチは、詩人出身の勅任視学官マシュー・アーノルドが、教育機会の拡張が万人に対して社会的上昇への道を開く可能性を認識しつつ、「知識は教育の最小限の一部にしか過ぎない」と知育偏重を戒めた、その時代感覚を評価する。

第2章では、「宗教と学習」の問題が論じられる。ヴィクトリア時代を通して、宗教は科学や知識との葛藤によって徐々にその権威を剥奪されたが、宗教と教育の関係もまた変化を免れなかった。労働者階級の子どものための国教会教義への馴化を目的に普及した基礎教育は、「読み書き能力の獲得」へと重点を移動し、他方、オックスブリッジは、1871年の宗教審査法廃止が象徴するように、聖職者養成機関としての性格を徐々に変容させた。パーチは、「宗教は常に絶対的なものであり、世俗的成功的手段におとしめられてはならない」と主張したラスキンの例を挙げ、多くの文学者が信仰を人間性の根源にある霊性の問題として捉えて毅然たる態度を貫いたと主張する。さらに、パーチは、宗教と階級やジェンダーとのかかわりにも論を進め、トマス・アーノルドの標榜するクリスチャン・ジェントルマンとは、「競争」「自立」というマスキュリンな価値と、「慈愛」「慎み」というフェミニンな価値とが「宗教」の衣によって中和されたものであり、他方労働者階級の子どもを慈悲深く描いたディケンズの作品は女性のドメスティシティと深く結びついていたことを指摘する。

ジェンダーは、「女性と教育」の関係を扱った第3章のメイン・テーマで

ある。ここでのバーチの視点は、19世紀の女子教育の展開を、「小規模で劣悪な私営学校の教育」から「大規模で優れた近代的な学校教育」への「進歩」の過程として直線的に捉える歴史観から自由であると同時に、近代的とされる女子学校が孕む階級とジェンダーの矛盾を抉り出した Carol Dyhouse や June Purvis等のフェミニスト的視点とも一線を画している。彼女が依拠するのは Mary Hilton や Christina de Bellaigue の近年の研究であり、改革前の女子学校の教育や教師を「時代遅れで劣ったもの」と括ってしまうことや、「素人の独身女性や寡婦の集団」から「専門的職業家集団」への転換という従来の教育史観に疑問を提起する。シャーロット・ブロンテやエレン・ウッドの小説に登場するガヴァネスや女性教師は、職業を通して経済的自立を獲得し、自己の人生を選択的に生きていく強さと主体性をもった女性として造形されており、「ガヴァネス、女性教師＝零落したジェントルウーマン＝時代の犠牲者」というステレオタイプはあてはまらない。同様にバーチは、従来保守的論者とみなされてきたエリザベス・シュウエルの再評価に挑む。シュウエルは、『教育の原理』（1865年）において、「家庭に準じた小規模な学校」と宗教教育を重視する論陣を張った。しかし、彼女における宗教教育は、理性の開発と思考の自由を前提としており、一般に考えられているような宗派的教義への恭順とも、受動的な女性観とも無縁であった。彼女の学校は、小規模であるがゆえに実験的であり、ラテン語や歴史を含む広範なカリキュラムと、生徒の個性を尊重する開発的教授法が導入された、とバーチはその革新的側面を指摘する。瞠目すべき見解である。

第4章では、イギリス社会と教育の動向を、ヴィクトリア時代からの長い歴史の光を通して照射する。かつて教育に導入された市場原理と成果主義は、知識の効率的な普及を通して産業化を支えるマンパワーの確保に貢献し、この国が富と権威を築く原動力となった。しかし拜物主義と数値主義は人間性の疎外を招いたばかりでなく、階級、ジェンダー、宗教による国民の分断化を促進し、その亀裂や矛盾を今日まで引きずっている。そればかりか、長期的な経済不振や失業率の上昇に加えて、近年のグローバル経済の影響を受け、福祉国家の基盤は根底から揺らいでいる。このような時代における競争原理と成果主義の導入が、格差や貧困の拡大、人間疎外を

促進することへの警鐘を、著者はヴィクトリア時代の文学者の言辭に託してうちならす。

繰り返しとなるが、本書は、表題が連想させるようなヴィクトリア時代の教育についての概説書でもなければ、この時代の教育と文学の関係についての総合的評論でもない。伝統的なアカデミズムのバランスに配慮したスタイルとは趣きを異にする。とりあげられる文学者と作品は、著者パーチの代弁者の役割を果たす人物に限られている。また教育と学習の主人公である教師や子どもの声は、直接本書には登場しない。どこまでも、文学に描かれた教師や子どもである。著者は、本書に出てくる詩や小説のプロットを知らない読者にも理解できる叙述を心がけたとしているが、他方で、この時代の教育制度の全体的輪郭を知らない読者には著者の主張が十分に伝わらない恐れも感じる。包括的なタイトルから足りないものをあげていけば多々あるだろう。しかし、本書は間違いなく面白い。過去と現代、文学と教育を自在に交差させて問題を浮かびあがらせ、論点を鮮明にしていくなその手腕は著者一流のものといえよう。本書のカバーにある ‘a remarkable and timely book’ というフレーズがただの宣伝文句ではないことを、多くの読者は納得するに違いない。

書 評

John Tosh, *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain: Essays on Gender, Family and Empire* (London: Pearson Education Ltd., 2005)

水間 千恵

本書は、歴史学分野におけるマスキュリニティ研究の先駆者のひとり John Tosh が、1994年以降に発表した論考（講義録含む）7編に、書き下し2編を加えて刊行した論文集である。*Manful Assertions : Masculinities in Britain since 1800* (1991、Michael Roper との共編著) の収録論文および *A Man's Place : Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England* (1999) から継続して取り組んできた研究課題、すなわち、ヴィクトリア朝の中産階級のマスキュリニティに関して、本書は、これまでの成果を補足し、かつ、その形成過程を明らかにするのみならず、思索の深化や考察対象の広がりなど、その後の研究の進展をも示すものとなっている。

全体の構成は4つのパートから成り、研究の意義、方法論等とも深くかかわる概論的な最初のパートに（第1～2章）に引き続き、18世紀半ばから20世紀初頭に至るマスキュリニティの諸相（第3～5章）、家庭におけるマスキュリニティ（第6～7章）、帝国とマスキュリニティ（第8～9章）という形で3つの主題が設定されている。

Agendas と題された最初のパートに配されたふたつの論稿は、いずれもマスキュリニティ研究における歴史学の立場と、その理論的枠組みの提示が主な内容となっている。Tosh は、集団的価値観に根差した男性の行動規範としてのマンリネス (manliness) に対して、マスキュリニティ (masculinities) を、階級、民族、セクシュアリティなどと広く結びついた、個人の社会的アイデンティティの多様性を示す中立的・包括的概念と位置づけ、これを用いることによって、最終的に、女性性との相関性のみならず、男性

間のヒエラルキーをも内包したジェンダー構造を可視化できるとする。そして、定点的な文化現象に依存せず、巨視的にその現象の生成過程や構造を分析できる歴史学は、マスキュリティをめぐる本質主義的な理解を打破する力を持つとその意義を説く。

第2パートのタイトルは *Changing Masculinities* であるが、ここでは必ずしも「変化」だけに力点が置かれているわけではない。第3章では、マスキュリティが、階級構造の変化や性役割の二極化といった、18世紀半ばから19世紀半ばにかけての社会的な文脈と結び付けて論じられているが、強調されるのは、変化よりも、むしろその一貫性や継続性である。つまり、ここで示されているのは、家父長制の維持装置としてのマスキュリティの一面なのである。第4章では、18世紀から19世紀にかけて、支配的なマスキュリティが、洗練された物腰や礼儀作法を中心とするポライトネスから、女性性との相関関係のなかで設定される、職業倫理と個人主義に根差した内面的な価値としてのマンリネスに移行する過程が提示される。また、中産階級の行動規範であるこのマンリネスが、階級を超えて、影響力を持ちえたことも指摘されている。第5章が焦点化するのは、女性の参政権運動の拡大期である。ここでは、19世紀末から20世紀初頭にかけてみられた未婚男性の増大、初婚年齢の上昇といった社会現象を、マスキュリティの重要な一部としてのドメスティシティの高まりに対するホモソーシャルリティの巻き返しという側面から読みとく。また、精神的支柱としての「母親」の役割が神聖視され、家庭内における権威が強まるにつれて顕在化する家長の権威との衝突や、それが子ども、とりわけ息子の教育に与える影響など、家庭内のマスキュリティについても考察が及ぶ。

家庭をめぐる、より本格的な分析は、*Family* のタイトルのもとにまとめられたふたつの章で提示される。家庭を構え、支配し、次世代を育てることは、伝統的な家父長制の枠組みにおいてもマスキュリティの重要な一部をなす。このうち、養育者としての役割に着目し、従来は否定的イメージで語られることの多かった父親像について新たな側面を明らかにしたのが第6章である。「専制的な父親」「不在の父親」という二極的なステレオタイプにあてはまらない、子育てに積極的な父親、子どもの良き遊び相手となる父親たちがいたことを、トッシュは資料から導き出す。さらに、その

ような心性や態度を重要な要素とした当時の中産階級のマスキュリニティが、子どもや女性との関係性のなかで示した相克にも触れる。第7章では、家庭におけるジェンダー構造を、宗教との関わりに焦点化して考察している。いずれもメソジストの、収税吏、製粉所経営者、豪農の事例研究を通じて試みられているのは、ヴィクトリア朝の家族に関する画一的な既成イメージへの異議申し立てである。これらふたつの論稿は、第5章とあわせていずれもドメスティシティとマスキュリニティの関係を探ったものであり、*A Man's Place* において、その成果が発展的にとりこまれている。

最後のパートには *Empire* のタイトルが付き、植民地とマスキュリニティの関係が考察される。第8章では、19世紀前半の移民たちがのちに記した回想録に加えて、移民志願者の申請書類、私的な書簡、移民を推奨するためのパンフレットや新聞に掲載された手紙などの資料を用いながら、農民や職人などを中心とする移民の経験を検証していく。故郷や家族と決別し未知の世界で新生活を切り開くという海外移住の決断は、それ自体が、勇気、自信、忍耐、独立心など、マンリネスの表明であり、しかも移住先の新天地は、身体的なマンリネスの獲得の場となりえたのみならず、職業生活における自立と自由の機会を提供したのである。つまり、海外移住は、国内でその機会に恵まれなかった男性にとって、社会的ステイタスとしてのマスキュリニティ獲得のための貴重な手段だったといえる。植民地が持つこの機能は、19世紀末からの新帝国主義の時代には、より鮮明になる。最終章では、多くの先行研究を参照しつつ、いくつか独自の見解を提示しながらこの点を概観している。学校や課外活動を初めとする諸制度を通じて青少年にすりこまれた植民地のイメージ、すなわち、ホモソーシャリティと強く結びついたマスキュリニティを保持できる場であるという認識が、帝国の維持・拡大にいかに関与したかという点が示される。

以上のとおり、本書は、考察対象が18世紀から20世紀にわたり、ジェントリ層や労働者階級に関する鋭い指摘もいくつかなされているが、主たる関心はヴィクトリア朝の中産階級のマスキュリニティに向けられている点で、前作 *A Man's Place* を踏襲している。だが、豊富な原資料を駆使して、事例研究に基づいて立論していた前作とは異なり、本作では二次文献の引用を中心とする論稿が大部分を占め、理論面での考察が中心となっている。

マスキュリティ研究における歴史学の有用性を力強く説くいっぽうで、これまで、著者自身が曖昧なままに用いていた感のある用語の定義にも紙幅を割き、他領域との比較を行っている点に、理論的支柱を作ろうとする著者の姿勢が読み取れる。この点から重視されるのは最初の2章であるが、前作までで深く追求されていない新たな主題を扱う最後の2章も興味深い。とりわけ、切り口においてオリジナリティを見せている第8章については、今後の進展が注目される。

著者の主要な関心テーマとなっている、マスキュリティにおけるドメスティックな諸価値や今回新たに示された帝国とマスキュリティについては、他領域、とりわけ文学研究では近年数多くの成果が発表されている。したがって、このような近接領域においても、本書の貢献するところは大きいと思われる。なお、用語について、各領域でのさらなる研究の成熟と相互参照による擦り合わせが期待される。たとえば、本書の第2章及び第3章で用いている「ヘゲモニック・マスキュリティ(hegemonic masculinity)」という概念の使用法については、他分野間と理解のずれを感じさせる部分もある(この点については、のちの論稿で Tosh 自身が詳細な考察を加えているため、そちらもあわせて参照する必要があるが)。いずれにしても、本書は、近年多分に学際的な色彩を濃くしているマスキュリティ研究の現状を強く意識した著作であり、そのこと自体に非常に高い価値が認められる。

書 評

Richard Menke, *Telegraphic Realism:
Victorian Fiction and Other Information Systems*
(Stanford: Stanford UP, 2008)

宮丸 裕二

インターネットが普及した今日では、自分自身に過剰に意識的な人間ならずとも、サーチエンジンの検索語に自分の氏名を入力して、不名誉なことが書かれていないかと確かめる、いわゆる「エゴサーチ」というものを定期的に行うことが必要で、これは情報化社会における最低限の自己防衛なのだそうだが、皆さんは、お試しになったことがあるだろうか。あるいは、検索の結果、果たして「2ちゃんねる」をはじめとする匿名サイトへ連れて行かれて、自らが完膚無きまでに批判され、罵倒され、貶められているのを目にし、嫌気がさしてか、恐怖心からか、しばらくパソコンのネット接続を控えるようになった経験はおありだろうか。どうやら、早くもヴィクトリア朝時代にこれを経験したのがカーライルであるようで、全国、全世界を隈無くつなぐ郵便のネットワークに自分も接続され、自分が選ぶところなく定期的に郵便夫が自宅に情報をねじ込んで行くことに居心地の悪さを感じ、その大きな網から離脱することを欲していたのである。カーライルにとっての手紙は、もはや見知っている書き手に代わって便宜的に事実を伝えてくれる何かではなくて、自分を取り巻く大規模な信号の連鎖の一部であり、うっかりするとそれを受け取る自分をも強制的に意味づけようとしかねない何かになっているのである。

現代の我々を包む情報化社会が、ヴィクトリア朝時代に完成したことを前提に、本書の議論は展開されてゆくのだが、中でも重点をおいているのは、単に情報の流通が活性化したことよりも、こうした警戒心も含め、現

代にいう意味での「情報」という概念そのものがこの時代に生まれ、人の考え方が現代のようなかたちに形成され始めたことの方である。

つまり、本書が問題にしているのは科学技術による伝達法の導入や変化と、それによって生じた人間が世界をとらえる方法の変化との関係である。実は20世紀よりも根本的な意味での科学による発明品が多かったといわれる19世紀にあつて、情報伝達に関わる発明も枚挙にいとまがないが、ここで問題にするのは郵便の改革、有線・無線による電報の発明である。同じく情報を伝えるのに関わる発明と考えられる鉄道、ダゲレオタイプ、電話、蓄音機、映写技術などは除外されている。郵便と電報にとりわけ着目する理由は、この二つの伝達法が、(飽くまで当時はであるが)複製できない一回性という性質を備えながらも、情報が特有な方法で変換されて信号となり、非物質化という過程を経て、伝えられるメディアであるためであり、たとえば写真に見るような意味での体感できる直接性がないというのである。また、常に流通し続けるネットワークは情報の遍在を意味し、絶えず人を情報が取り巻く状況を作り出すとともに、人があずかり知らぬところで絶えず記録として貯蔵されてゆく。ヴィクトリア朝における識字率の向上との関係で言われる文字文化にまつわっては出版文化や教育の発展に注目して語られることが多いが、ここで著者がより大きな影響としてまず注目するのは私信の集積なのである。そして、そこで運ばれ伝えられている内容は、人の「考え」とか「思い」ではなくなり、既に自分を取り巻く知識の集積である「情報」というものに変質した。あらかじめ情報の網が張り巡らされた世界においては、手に取る実物の物や実在の人物は、その情報のつなぎ目に過ぎない位置づけを与えられる。すなわち、伝達する情報はそれ以前から存在したにせよ、情報が、今日に我々がとらえるような意味での「情報」というものになったのは、この時代の伝達法の変化、特に郵便改革に起因している。

こうして流通する方法が、流通する内容の質を変化させ、それがいかにして、人の世界のとらえ方を変えたのかを文学の中に検証してゆくのが本書の主眼である。新たな技術が生まれると当然その技術はその時代の文学作品に登場することになるし、それを枠組みに使った書簡体小説も増えてくるが、本書のねらいはそれを捨ててゆくだけの作業にとどまっていない。

ヴィクトリア朝時代の小説のリアリズムの変質の一要因を、こうした技術の導入による感覚の変化に帰してゆくのである。虚構小説におけるリアリズムの検証にこそ、「当時の読者や当時の人々に、どういうことが本当らしく感じられたのか」という認識の定着の証拠が眠っているという方法論は本書に一貫している。本書より一例を挙げれば、『ジェイン・エア』のクライマックスにおいて、ロチェスターの声をジェインが聴くことは物理的には不可能でありながら、それを滞りなくリアリズム小説に組み込んでいる。これは電気ではないとわざわざ小説中で説明があるし、無論、電報によるものであるわけもない。しかし、こうした当時話題の諸発見、諸技術についての知識から、科学的ななにかしかなによる遠隔伝達をブロンテが既に自然に感じるようになっていた、ないし、読者が自然に感じるだろうとブロンテが見込むようになっていたことが前提となっている、といった具合である。

本書全体の構成としては、第一部で、切手の導入に象徴され、配達件数を十数倍と爆発的に増やした1830年代の郵便改革と、電気の最初の実用化である電報の導入による直接的変化の萌芽を小説の物語内容の中で扱っている。ディケンズ、トロロップ、シャーロット・ブロンテの作品を例に挙げて具体的な論を運んでいる。

続いて第二部ではそうした遍在する情報が著者と読者とをつなぐ語り方に現れ、直接読者に情報を手渡す従来の語りを変質してゆく様子が描かれてゆく。例えば、『二都物語』、「信号手」、ジョージ・エリオットの長編・短篇の中に見る時空を超える語りを分析している。

さらに最終部では、ヘンリー・ジェームズの *In the Cage*、キプリングの「無線」を扱い、排他性と漏洩性を併せ持つ無線による伝達に着目し、現実と情報の狭間、新旧の語りの狭間の重要性を指摘する。ある種の矛盾の中での世界観の構築しかあり得なくなるその後の時代を考察し、実は根本のところでは情報に根ざした虚構を媒介にしか現実を体得しえなくなっていたモダニズムという時代、そしてその延長としての現代という時代までを説明する。

昨今の出版状況を見渡して、郵便や電報の発展のような特定の歴史的対象を文学作品との関係で扱う本が多く、あるいはそうしたものは今では減

り始めたのかも知れないが、本書の評価すべき点は、少なくとも文学批評と表紙の端に書いているからには、歴史的な事象の事例を文学作品に見つけては羅列してゆく研究とははっきりと一線を画しており、飽くまで文学作品の記述を根拠に当時の人の認識のあり方を問題にしているところだろう。歴史研究と文学研究の境目が問われて久しいが、文学研究にしかできない考察というのは本書のような線かと思われるし、また文学という分野が独自性を保ちながら研究を行う際にもその余地はこうした語り方の問題を扱うところにはしかないのかとも思われる。

そうは言いつつも、郵便と電報に関する歴史的知識を多く提供してくれる本であり、相当のページを割いてこれらの導入と発展に関する基礎的な経緯を丁寧に紹介しつつ進めてくれているので、その後の議論が読みやすいだけではなく、郵便と電報についてある程度知っておきたいという方にも有用な本であろう。しかし、そのことにまつわって気になる点は、歴史的経緯を語り、データを提供する段になると、作品論の根幹に関わる部分であっても、いささか古びた他の研究書の参照に徹してしまうことである。調査に地理的制約があることによるものか、あるいは上記の通りの歴史研究を主眼としていないからなのかは不明である。しかし、実地の歴史の基礎的調査研究が遠のいているか、あるいは局所的になってしまっている傾向を物語っているし、私自身が、冒頭のカーライルが抱えた事情とその気持ちにも増して、この点に関して著者に対する同情を禁じ得ないだけに、残念な側面として指摘しておきたい。

書 評

H. S. Jones, *Intellect and Character in Victorian England: Mark Pattison and the Invention of the Don* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007)

舟川 一彦

マーク・パティソン(1813-84)は、子供の頃からオクスフォードを目指して父親に教育され、若い頃にニューマンの影響を受けてトラクト運動に参加、のちに自由主義者となって大学の機構や教育、学問研究について先進的な理念を唱道し、リンカン・カレッジの学寮長を長年(1861-84)務めた。つまり、ほぼ終生オクスフォード大学の中で、大学の問題と付き合いながら生きたような人物である。

二年前にパティソンの回想録を翻訳出版した時、私は「解題」の中で、ヴィクトリア時代屈指の大学知識人のひとりであり、現代の大学を仕事場とする我々の真摯な関心に十分値するはずのこの人物が、それにもかかわらず不当に等閑視されてきたという事実に言及した。このたびジョーンズの『ヴィクトリア朝英国における知性と人格』が出たことで、この不自然な状態がようやく解消されたことになる。この本は、イギリスの大学が近代的な学問施設へと変貌を遂げた時期に、まさに渦中であってその動きに参与した大学人・思想家パティソンを、人物と仕事の両面から詳細に吟味評価した初めての本格的な研究書である。まずはそのことだけでも意義は大きいと評さなければならない。

この研究書は二つの点で「本格的」である。第一は、文献学的な網羅性という点。パティソンのようにこれまで専門的に研究されてこなかった対象を扱う場合は必然的にそうせざるをえないのだが、この本は、同時代の定期刊行物に発表されたままパティソンの著書に収録されなかった多数のエッセイ類や、方々に散在する大量のマニュスクリプト資料を徹底的に発

掘し、利用している。そして、おそらく紹介の意図もあって、それらを意図的に多量に引用している。近年、ヴィクトリア時代の定期刊行物は検索手段の充実もあって利用しやすくなっていることは確かだが、それにしてもこの労は多とすべきだろう。第二は、対象であるパティソンを、(以下の内容紹介からおわかりいただけるように) 特定の面に限定することなくあらゆる側面から一人間として、大学人として、聖職者として、学者として、思索家として、著作家として — 総合(統合)的に考察しているという点。このアプローチもまた第一の点と同様、パティソンという対象の性質から必然的に要請されるものだが、それについてはのちほどもう一度触れることにする。

この本は、序章と、伝記的事実と『回想録』(Memoirs)における自己描写に基づいて人間パティソンを考察する前半三章、著作や未公開原稿その他を資料として彼の思想内容そのものを分析する後半三章、終章と、第一次資料と第二次資料を含む詳細な文献リストから成っている。

序章で著者は、十九世紀が近代的大学の原型を創造した時代であることを確認し、その中でパティソンが決定的に重要な位置を占めることを指摘する。第一章は、1851年の学寮長選挙落選までの伝記的事実とパティソンの人格形成、およびそれ以後、書評誌を主な舞台とする彼の著作活動の足跡を、『回想録』に描かれた主観的自画像を他の資料によって修正しながらたどる。第二章では、1861年の学寮長当選の裏事情と、年齢の離れた妻との不幸な結婚生活が物語られ、女子教育普及運動の支援などの社会的活動、(特に女性との) 社交活動、『ミルトン』をはじめとする著作活動が概観される(学寮長としての仕事についてほとんど記述がないのは、彼がそれをほとんど放棄していたからだ)。第三章は、死後出版された『回想録』執筆の経緯および内容と、出版後の諸方面からの反応を分析する。ジョーンズによると、『回想録』に描かれた題材(オクスフォードの内幕)やパティソン自身の特異な性格(病的な内向性と自意識)、宗教信条の変転(福音主義から高教会、そして不信仰へ)の生々しい描写が関心を呼んで出版直後のブームが起こったのだが、まさにその内容のネガティヴさが、後々パティソンの名声を害する要因になったのだという。

後半の三章は、学問研究の営みについてのパティソンの考えを整理・再

構成することに充てられている。まず第四章では、個人のレベルにおける学問活動。実利や社会との直接的な関わりを度外視して禁欲的に学問そのものに没頭する「学者としての人生」がパティソンの理想であったと著者は述べ、その理念の出どころをドイツの新人文主義およびロマン主義のみならずニューマンの影響やオクスフォード運動の経験の中にも見いだしている。第五章は、学問活動の場である大学についてのパティソンの考えを扱う。彼は、学問を職業（vocation）として確立し、「学者としての人生」を可能にするために、既成の英国大学をドイツ風の専門分化され序列化されたプロの学者から成る教員組織をもつ学問施設に作りかえることを提唱した。これに関連して著者が強調するのは、これは（しばしば言われるような）〈教育〉から〈研究〉への路線変更ではないということだ。パティソンはあくまでもリベラル・エデュケーションを旨とする英国型大学の伝統を堅持しながら、そこにドイツ的な教員組織とリサーチ理念を「接ぎ木」しようとしたのだと彼は説明する。第六章は、パティソンの研究活動の中核的な位置を占める「思想史（intellectual history）」の概念を解説する。啓蒙主義以後の進歩史観と（ミルに代表される）伝統の批判的受容という自由主義的発想が相まって発生した思想史はパティソンにとって、思想の歴史的発展の法則を扱うひとつの研究分野であるとともに、あらゆる論題を過去の研究史の把握に基づいて考察するという彼の学問研究の方法論的原理でもあったとジョーンズは言う。終章で著者はパティソンを、社会貢献よりも真理探究と自己啓発という個人的・内発的な動機を優先させる「主観的」なタイプの知識人と分類した上で、それにもかかわらず、近代世界における大学人の使命を身をもって同時代の人々に認知させたという点で、歴史的・社会的な意味を持つ存在だと評価する。

ジョーンズの本は、二つの系統の先行研究と関連づけて考えることができる。ひとつはパティソンの（内面形成も含めた）伝記研究である。1950年代以来、グリーン（V. H. H. Green, *Oxford Common Room*, 1957）とスパロウ（John Sparrow, *Mark Pattison and the Idea of a University*, 1967）という二人のオクスフォード大学人がこの系統の研究に基本的な情報を提供してきた。最近ではナトール（A. D. Nuttall, *Dead from the Waist Down*, 2003）が独特の切り口でパティソンの伝記的事実を意味づけている。ジョーンズ

はこれら先行研究の中に散見する誤りや不適切な判断を修正し、現時点で最も信頼できる人間パティソンの姿を描き出した。この点は高く評価できる。ただ、あえて一点だけ但し書きをつけるならば、このパティソン像はあまりにも収まりが良く、端正すぎるという印象を与えるのだ。従来のパティソン像が彼の「変節」や「転向」を強調しすぎたのに対し、ジョーンズは一貫性を際立たせようとする。が、整合性を求めるあまり、具体的な論証に無理が生じている箇所もいくつかあるように思える。例えば彼は、パティソンの教育信条がオクスフォードの伝統である全人教育の理念に一貫して基礎を置いていると主張するために、学生に向けて行ったいくつかの説教を主たる資料として利用している（第四章）。だが、実は、公刊されたパティソンの説教集から判断すると、1865年を最後に彼は説教の中で全人教育やリベラル・エデュケーションについて語ることをやめてしまっているのだ。この事実はどう説明できるのだろうか。

この本と関連づけるべきもう一種類の先行研究は、大学や学者の社会学的功能、また知識人の社会的地位づけの歴史的変遷に関するもので、ロスブラット (Sheldon Rothblatt, *The Revolution of the Dons*, 1968)、ハイック (T. W. Heyck, *The Transformation of Intellectual Life in Victorian England*, 1982)、エンゲル (A. J. Engel, *From Clergyman to Don*, 1983)、ハルシー (A. H. Halsey, *Decline of Donnish Dominion*, 1992) 等を実例として挙げる事ができる。著者自身が示唆しているように、彼はこれらの研究を意識し、実際に利用している。ただし、その結果について、物足りなさを感じる読者もいるだろうことは十分想像できる。この本では、この方面の議論をまとまった形で展開するよりも、パティソン個人の間人としてまた思想家としての強烈な個性を描き出すことに圧倒的な重点があるという印象をどうしても受けてしまうのだ。が、おそらくそれは、著者の落ち度というよりはむしろ対象そのものの性質に起因するところが大きいのだろうと思う。パティソンの(教育者、学者、作家としての)仕事は、彼の特殊な気質や個人的事情とあまりにも深く絡み合っている。パティソンは、気質ゆえに不機嫌なハリネズミのように時代に対して棘を立て、社会が彼に与えた役割を拒否した(ジョーンズがこの本の中の数箇所ですのような態度を「カウンター・カルチャー的」と呼んでいるのは適切だ)。だから彼は時代

や階級の代表たりえない。教育について、また学問について、宗教について語る時、彼は自分の時代には存在しないものについて語っている。そして、逆説的に、まさにその〈反時代〉的な態度のためにパティソンは歴史的に意味ある存在となりえた。かくも複雑な存在を扱うにあたって、著者が伝記（つまり人格の描写）を軸にした統合的アプローチを採ったのは必然の選択だったと私は考える。

最後に苦情をひとつ。権威ある出版局から出た本に似つかわしくない単純なミスが目につく。明らかなものだけを挙げておく。

一、‘Philosophy at Oxford’ というエッセイのタイトルが、本文、注、文献リストを含むすべての箇所（230頁の注43の一例を除く）で ‘Philosophy in Oxford’ と誤記されている。

一、182頁29行 （誤） *as lecturer* （正） *as lecturer*

一、206頁の注86 （誤） *Cornhill Magazine* （正） *Cornhill Magazine*

一、210頁の注103 （誤） *Liberal and a Liberal Education* （正） *Learning and a Liberal Education* （巻末文献リストでも同じ誤り）

書 評

Tomoko Masaki,
A History of Victorian Popular Picture Books
(風間書房2006)

川端 有子

総ページ数817ページに及ぶ Part I、その中で論じられたイラストレーションすべてを総カラーで収めた195ページからなる Part IIで構成されたこの超力作は、著者の六年間に渡るイギリスでの研究の成果のすべてを盛り込んだ博士論文を出版したものである。

いまでこそ、聖徳大学の大学院教授を勤めておられるが、著者はそもそも在野の絵本研究者であり、自宅で子ども文庫活動を活発に行って、子どもの本とその読者たちの現場に関わる長年の経験を有していた。その経験から、「絵本とは何か」「絵本とはどこから発生してきたのか」という素朴な、かつ根源的な、しかし誰もあえて直接向かい合おうとしてこなかった問いを抱き、抱いたばかりかその解明のため、五十歳を過ぎてから、単身、イギリスのサリー大学ローハンプトン校の大学院、国立児童文学研究所に留学。イギリス人研究者も手をつけたことのなかった「トイ・ブック」という、絵本の直接の祖先の調査と研究に乗り出したというのだから、その情熱は推して知るべきである。

たまたま正置氏とは昔からの知り合いでもあり、彼女がこの論文の最後の仕上げをしている年に、同じ研究所に身を置いて、博士論文に取り掛かっていたわたしにとっても、その情熱はつねに励ましとなり、模範となり、力強い支えとなってくれた。書き上げた原稿を紫の風呂敷に包み、指導教授の下に持参する正置氏の姿はいまも記憶に新しい。

ラウトリッジ社だけでも444タイトルが出版されていたヴィクトリア朝時代、トイ・ブックはまさにこの当時の文化や印刷テクノロジーの総決算と

もいうべき大きな存在であった。にもかかわらず、正置氏が着手するまで、誰一人としてこの宝の山に手をつけようとはしなかったのは不思議であるが、これが見過ごされてきたのにはわけがある。通常、流通している入門書などで、子どもの絵本の歴史を調べようとすると、必ず引き合いに出されるのは、16～19世紀に大量生産され、出回っていたチャップ・ブックである。これは必ずしも子ども向けのものではないが、木版印刷の絵がついていること、「ジャックと豆のつる」などのフェアリー・テイルを題材にしたものがかなりあることなどから、絵本の源流と考えられてきた。しかし、チャップ・ブックは、一枚の紙に印刷され、折りたたんで16ページないしは24ページにしたもので、絵と文は別々に印刷されている。これは、表表紙と裏表紙に囲まれ、見開きになって、絵とことばがコラボレートして中身を伝え、つづけてページをくっつけていくことにより物語が進行するという、基本的な絵本の流れを持ってはいない。しかもチャップ・ブックの挿絵は粗雑で、使い回しされるほどありきたりで、到底芸術的な価値をもって創造されたものではなかった。

19世紀にはいって、チャップ・ブックが衰退し、こんどは確かに子どものために、高水準な絵を用いた薄い色刷りのトイ・ブックが誕生する。版画家エドモンド・エヴァンズの考案した小口木版の多色刷りは、同じページに字と絵を同時に印刷することを可能とした。正置氏によれば、ウォルター・クレイン、ラルンドルフ・コールデコットといった画家たちが活躍することではじめて、トイ・ブックは今日ある絵本の基礎を築いたのである。だが、いかんせん、「トイ」ブックという名称がまずかった。この名前のため、トイ・ブックは子どものおもちゃの一種ととらえられ、まともな研究の対象になってこなかったのである。正置氏自身、児童文化関係の国際学会で「トイ・ブック」の発表をすると申し込んだら、「おもちゃ、その他」のストランドに入れられてしまったと、研究者仲間でも理解が得られていない現状をよく嘆いておられたものである。

この研究は、数あるトイ・ブックの出版社の中でも、ラウトリッジ社のものが調査の対象に選ばれている。その理由は、ヴィクトリア朝を通じて、コンスタントにトイ・ブックの出版を手がけていたのが当社であること、また、トイ・ブックの質を芸術的・技術的な面で飛躍的に向上させたウォル

ター・クレインとランドルフ・コールデコット、そして二人の絵を版画として印刷したエドモンド・エヴァンズの傑作を出版していたのがラウトリッジであったことによる。

子どもの絵本はいわば「エフェメラ」である。愛された本ほど、ぼろぼろになって原形をとどめていなかったり、紛失してこの世になくなっていたりする。出版年を確認することも難しい。西にトイ・ブックがあると聞けばカメラを担いでその地に向かい、東にあると聞けば東に向かい、こつこつと記録をとり、ラウトリッジ社のアーカイブで確認を取り、1850年代から1890年代にいたる同社のトイ・ブックのフォーマット、タイトル、画家、版画家、ページ数、構成、出版年、発行部数、値段、所蔵地などを表にまとめた一巻末のカタログの膨大な情報量。いくら6年かけたとはいえ、一人の人間の仕事であると考え、気の遠くなるような集中力と探究心が必要だったことであろう。大英図書館の目録に誤りすら見出したというのだから、つつい他人の研究の成果におんぶして論文を生産しているわが身を反省させられる。このカタログと、そのヴィジュアルの資料を取めた二巻目についての解説が、一巻目の最初を構成している。

その一巻目の構成は次のようなものである。第一章では、ヴィクトリア朝のコンテキストにおけるラウトリッジ社のトイ・ブック出版の歴史、第二章では、表紙のデザインに見る芸術性の発展と印刷術の歴史、第三章ではトイ・ブックの印刷者たちとヴィクトリア朝の絵本現象が解説されている。そして、最終の第四章では、とりわけエドモンド・エヴァンズが焦点化され、彼がラウトリッジ出版においてさまざまな画家たちと協力関係を結ぶことで、多色印刷と絵本のデザインを飛躍的に向上させたことが検証される。

こうしてトイ・ブックの歴史がつぶさに解説されていくと、ヴィクトリア朝文化がまた違った側面から見えてくるものである。1865年という年が、どれほどの意味を持った年であったか、この年に出版された『不思議の国のアリス』の冒頭で、アリスがつぶやく「挿絵や会話のない本なんて、なんになるのかしら」というせりふが突然、色のある、意味のあるせりふとなって浮かび上がってくる。なぜならこの年は、ラウトリッジのトイ・ブックの最盛期を画する年であるからだ。

かさなって同じ意味で使われていたトイ・ブックとピクチャー・ブックという言葉が、だんだん違うものをさすようになり、やがてトイ・ブックは姿を消し、現在のピクチャー・ブックとして統合される過程、子どもの消費物的なおもちゃとしてしか認識されてこなかったトイ・ブックに、実はエヴァンズの情熱が、かけられていたこと、トイ・ブックに関わってきた人々が、真摯に子どものために、芸術的な絵本を生産しようとしていたこと、あらゆる面でヴィクトリア朝文化と関わる万博も、トイ・ブックの形態に大きな影響があったことなど、子どもの文化からいまいちど、ヴィクトリア朝をとらえなおす視点の重要性を実感する。

女性の視点からのヴィクトリア朝文化や文学の見直しはもうずいぶん発展し、それなりの成果を挙げてきた。その方法論を用いつつ、こんどは子どもの所有していた文化にも光が当てられるべきときであろう。

この分厚い二冊の本はまた、いわば文学研究の基礎の基礎、われわれ外国文学の研究者がついおろそかにしがちなフィールドワークの大切さを思い出させてくれる。理論や思想に偏り、机上の議論が大勢を占める昨今の研究論文を見るにつけ、もう一度根本に戻り、自分の目でしっかりと対象を見据える姿勢を忘れてはならないと反省させられることしきりである。だが、また、このトイ・ブック調査のおかげで、これを土台として発展させていく理論的・分析的研究が可能になるのも確かである。ただのおもちゃ、と見なされていたトイ・ブックが、絵本の源流であるのみならず、ルイス・キャロルとの関連、万博の影響、出版文化、エドモンド・エヴァンズの技術、小口木版と美術、印刷術とデザインなど、ヴィクトリア朝文化研究のさまざまな様相と重要なかかわりを持つことが明らかになった以上、多方面に専門を持つ本学会員らによる、今後の応用・展開が期待される。

ちなみに、この著書の書評を引き受けたその晩、偶然にも正置氏から連絡があり、イギリスの学会、Children's Book History Society から、この本がハーベイ・ダートン賞を贈られたとのうれしい知らせが入った。子どもの本の歴史研究の草分けであるダートンの名を冠したこの賞を外国人が受賞するのは、もちろん初めてのことであり、日本人の研究者が比較的保守的な英国の学会でここまで認められたという事実は、まことにわれわれにとっても励みになることといえよう。

書 評

荻野昌利

『「もの言えば…」 ヴィクトリア朝筆禍事件始末記』
—宗教と芸術—

(英宝社ブックレット、2006年)

田中 裕介

ヴィクトリア時代を研究するための第一歩は、この時代をひとつの均質な擬似空間として捉える観点から脱却し、その内部における歴史の微細な変動の感覚を体得することであるのかもしれない。しかし文学研究者は、個別の作家研究、作品研究という枠組みを手放すことのないまま、「ヴィクトリア時代」を論述の平板な背景として使い、それをもって「文化研究」を僭称することが多いようでもある。それは「歴史」を利用するだけであり、「読む」ということにはならないのではないか。前著『歴史を<読む>』に続き、荻野氏は、そのように問いかけているかのようだ。ヴィクトリア時代に起こった二つの歴史的論争を扱うことによって、自称「文化研究」とは一線を画する、広い意味での言語テキストの分析を通じた歴史研究の可能性を、本書で著者は探っているといえよう。「歴史」は、一人の作家の名前に収斂するテキスト分析からは必然的に零れ落ちるのであり、複数のテキストがぶつかり合うその間隙にかろうじて露呈するものなのではないか。本書の根底には、研究の方法論に関わるそのような本質的な問いかけがある。その意味で、タイトルの横に添えられた「もの言えば…」という句や、本文中の「火事場の馬鹿力」「大山鳴動してねずみ一匹」「とらぬ狸の皮算用」といった慣用語に見られる軽妙洒脱な言葉遣いから、時代を象徴する二つの「筆禍」事件を、単にやわらかく、わかりやすく語っただけの著作とのみ本書を捉えるのは早計である。言葉の軽みは、書物全体が提起する重い問いかけを中和するための、著者一流の洒落っ気、ないしは照

れかくしなのであろう。

第一部で扱われているのは、ジョン・ヘンリー・ニューマンとチャールズ・キングズリーの論争である。それぞれカトリック教会と英国国教会に属する当時の大物宗教家である。さぞ難解な宗教論議が扱われているのだろうと身構えてしまうが、著者が描き出すのは、その人間像について共感を覚えてしまうほどあまりに人間臭い二人の男の姿である。言わずもがなといつていいニューマンへの当てこすりを粗忽にも書いてしまうが、当人からの反論を受けると自己の体面を守りつつ事を収めようとする軽率な小人物、キングズリー。キングズリーの自分への言及を奇貨として、世間に対する自己弁護の機会を巧みに形成する海千山千の論争家、ニューマン。「それはまるで時代を代表する二大俳優がいわば陰で操る演出家の扇動に乗せられて、引くに引けない状況におかれ、それぞれの面子をかけて舞台上での大勝負に打って出るようなもの」と煽り立てる著者の手で論争の推移が活写される。第二部においては、名高いホイッスラーvs.ラスキン裁判について、当時の両者の置かれた状況が多角的に検討され、二人の言葉がその時点で相まみえざるを得なかった経緯が丁寧に解きほぐされる。若き天才批評家として出発しながら、尊大な姿勢を崩さないまま次第に時代から取り残されるラスキン。大批評家を相手取った訴訟で逼迫した財政危機を乗り切ろうともくろむ山師ホイッスラー。両者の衝突が、単に白黒が明確になるだけには取まらない「巧みに仕組まれた推理劇」として効果的に再構成される。著者の硬軟自在の絶妙な語り口に身をゆだねるだけで、ヴィクトリア時代を代表する言論上の事件の輪郭を楽しく知ることができる。本書はそのような本である。それだけで充分なのかもしれないが、ヴィクトリア時代研究に携わる者としては、本書を通じてその歴史を「読む」という行為を意識せざるをえない。そう考えると、著者が個別具体的な出来事を扱いつつも、この二つの「筆禍事件」を通してヴィクトリア時代全体を俯瞰する野心的な意図をもっていることが浮かび上がってくる。

第一部では、ニューマンとキングズリーの言葉の応酬が扱われているだけではない。その論争が、ニューマンの主著であり、ヴィクトリア時代を代表する自伝のひとつ『アポロギア』の成立背景であったことが自然に語られてゆく。厳密な文献批判の視点に立脚しながらも、過度にリゴリステ

イックな記述に著者の言葉は陥ることはない。あたかもプルーストの文体を分析するかのように、オックスフォードを去る日の情景を描き出すニューマンの筆致に光を当て、その「過去と現在を織り交ぜ、個人的体験を普遍化する」手法を強調する箇所は、論述全体にあざやかな彩りを添える。さらに『アポロギア』をニューマンの個人史から、ヴィクトリア時代の思想史の広い文脈に解き放つことに成功している「第四章 『アポロギア』の意味 真の宗教的権威とは」は本書の白眉であり、きわめて刺激的な洞察に満ちているといえよう。

この論争が発生した1860年代をヴィクトリア時代の歴史の大きな結節点として捉えていると思われる著者は、その知的趨勢を、ニューマンの言葉を援用して「底なしの自由主義思想」と概括する。ダーウィンの『種の起源』(1859年)が決定づけたといってもよい「ラシヨナリズムの勝利」を背景としているそのような「自由主義思想」を国教会内部において体現していたのが、キングズリーであった。宗教思想に精通している著者は、さらにキングズリーの立場に「当時の国教会のかかえた問題の深刻さと複雑さ」を看取り、その言論を「妥協を尊ぶヴィクトリア朝の消極的局面を余りにも反映したものだ」と断じる。そのようなキングズリー理解を前提とすれば、ニューマンとの言論上の争いは、単なる局所的な私闘ではなく、「ともに時代を代表する思想の宿命的対決」となるだろう。この論争において著者が重視するのは、キングズリーのいかにもヴィクトリア朝的な妥協が「紳士」という概念と強く結びついていたという点である。ニューマンにとっては、この「紳士」という言葉に象徴される行動規範が、視えない言語の牢獄を形成しているかのように思われたと著者は分析する。彼の激しいキングズリー攻撃は、同時代の言語のあり方への批判を通した「ヴィクトリア朝における不文律への挑戦」だったのである。

この論争において焦点となったのが、「真実」なる語であったという事実はきわめて意味深い。論争のきっかけとなったのは、「ニューマン神父のわれわれに語るのところでは、真実は必要ないし、一般的に、真実であってはいけないものだそうである」というキングズリーの不用意な一文であった。キングズリーには「ニューマンがつねに真理を弄んでいるという揺るぎない信念」があったということだが、ニューマンにしてみれば、このような

漠然とした人物評価を知的判断に混入することこそが、時代の雰囲気に関わられて「真実」を見失っているとしか思えなかったのである。ニューマンはあくまでもテキストの読解に即した立証を求め、それに応えられない相手の誤読を衝くのだが、キングズリーは「紳士にふさわしい」曖昧な謝罪文で事態を糊塗しようとしたばかりか、反撃を受けると「常識が通用しないものは真実に背くものであり、危険なものだという論法」を弄する挙に出る。そこで「論理よりむしろ心で、一人の人間の精神の移動の逐一」を描き出すことを通して、自らの「心の歴史」こそを「真実」として提示しようとしたのが、『アポロギア』であったのだ。ここで著者は、「言語」（「テキスト」）と「真実」の悩ましい関係を炙り出すことで、ヴィクトリア時代の思想を、プラトンからポスト構造主義までの西洋思想の大きな流れの中で捉える意思を示しているということができよう。

評者は今年ある授業でミルの『自由論』を講読したのだが、『種の起源』と同じ1859年に刊行されたこの社会思想の名著を精読して、ウィルキー・コリンズ『月長石』（1868年）がイギリスにおける嚆矢ともされている探偵小説というジャンルが発生した知的文脈の一端を理解できた気持ちになった。「真実」が相対的で部分的なものであると考えるミルは、主流派が掲げる「真実」とは別の「真実」が生息する余地を与えるために、言論の「自由」が保証されるべきであると説く。全体的な「真実」は、探偵小説における事件の真相と同じように、複数の「真実」の断片を組み合わせる時間的な過程を経てはじめて現出するのであり、ア priori に存在するかのように見える「真実」なるものは何らかの虚構であり、現代的に言えばイデオロギーに粉飾されているのである。

ともに「真実」の相対性を前提とするリベラリズムと探偵小説を産み出した同時代の思想の主潮に、ニューマンは敢然と対峙したといえよう。彼はその精神的自伝において、他ならぬこの自分が抱えている内面の歴史こそを絶対的な真実を顕す時間的過程として対置したのであり、その探究を保証する枠組みとして、カトリックの「権威」を正当化しようとしたのである。いや、この経緯はもっと複雑微妙であり「行動の決断をするには、理性の下した判断を信じていると改めて信じる必要がある」という認識、すなわち「堅信」について明解に説く本書のページを実際にめくってもら

うしかない。「絶対的権威」を求める逡巡の果てに行動に跳躍するニューマンの思考は、明らかにマシュー・アーノルドのそれと並行性を示しており、その解説は、評者にとっては知的興奮を禁じえない刺激的なものであった。「それは過去への限りない憧憬、現実の体制への激しい反発という、ロマン主義の精神を胚胎しながらも、ロマン主義の否定する権威の概念を逆に積極的に肯定しようとする点で、反ロマン主義的であり、理性の信仰への干渉をひたすら拒否している点で、反主知主義的なものであった」という一文は、『文化とアナーキー』（1869年）の核心を示す表現としても適用できるであろう。

ホイッスラーvs.ラスキン裁判を扱う第二部には、「第一部 第四章」のような理論的濃密さはないといえるのかもしれない。しかしこの第二部においても、出来事の単なる記述を越えてその思想史的な意味に肉迫しようとする著者の意図はありありと感じ取られる。

1877年5月1日グローヴナー・ギャラリー開設記念展で展示されたホイッスラーの絵画に対して、ラスキンは、「めかし屋の絵描き風情が公衆の顔に絵具壺を投げつけておいて、その代価に二〇〇ポンドを要求するなんて、まさか聞こうとは思ってもいなかった」という悪罵を投げつける。総じての低評価に不愉快な感情を抱いており、また当時財政的にも逼迫していたホイッスラーはさっそくラスキンを提訴し、評判と金銭をとともども得ることをもくろむ。結果的にはホイッスラーの形ばかりの勝訴となったこの出来事を、著者は「体制擁護派」に芸術至上主義を標榜する新勢力が戦いを挑んだ「最初の記念すべき事件」と位置づける。「人生のための芸術」か「芸術のための芸術」かがここで問われていたと説き「絵そのものの線、形、色の調和という形式の優位性」をホイッスラーの絵画から析出するのはやや常識的な見解であろうが、ラスキンの罵言の「二〇〇ポンドの代価」という語句に注目して、彼の芸術的立場に関して、その「労働崇拜」を強調する記述はきわめて示唆的である。唯美主義がヴィクトリア朝末期の社会に無視しえぬ衝撃を与えたという事実はよく耳にするのだが、それは芸術論のみでは扱うことのできない問題であり、従来世紀末芸術論からは納得のできる説明はなかなか得られなかった。ここで著者が提示した「労働」という概念は、唯美主義を芸術運動というよりも社会現象として考察する

上で鍵になりうる語かもしれない。ホイッスラーの芸術と、彼が差異化を図ったと著者の論じるワイルドなど文学者との違い、加えて20世紀のモダニズムの芸術家との連続性と非連続性を、さらに「労働」という概念を適用して分析することは可能だろうか、そのような問いを得て評者は大いに刺激を受けた。

歴史を語るためには、歴史を読まなければならない。しかし文学という、あるいは歴史という一つの学問分野に囚われたままの読み方からは、「歴史」は浮かび上がってはこない。さまざまなテキストを柔軟に読みこなし、その成果を表現する文体を工夫しつつ自己の思想を磨いていく。そのようなきわめてオーソドックスな人文学のスタイルを成熟させる過程でこそ、歴史を多角的に捉える視線は養われるのであり、そこに学問の醍醐味はある。本書はそのような真っ当な学問のあり方を教えてくれる小さな名著である。狭いテーマ設定に基づく研究を重ねるといった回路に陥り歴史を知る楽しみを見失っている若い研究者の方々にとくに一読を薦めたい。

書 評

松岡光治編著

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の
社会と文化』

(溪水社、2007年)

橋野 朋子

本書は、編者松岡光治氏が、2003年にギッシングの没後100年を記念して出版した『ギッシングの世界－全体像の解明をめざして』（英宝社）に引き続き、2007年の生誕150年を記念して出版したものである。ギッシングの研究書であることは一目瞭然であるが、タイトルにいうように、本書のテーマはあくまでも「後期ヴィクトリア朝の社会と文化」であり、読者対象はギッシング研究者に限らない。読者は、この一冊から、主として後期ヴィクトリア朝の文化的、社会的背景に関する包括的な知識を得ることができるであろう。それだけ本書で取り扱われているテーマは多岐にわたっているものであり、その情報量はかなりのもので、通読した際には相当な読み応えを実感する。

本書は、大きく「社会」「時代」「ジェンダー」「作家」「思想」の5部から構成され、そのそれぞれが異なる研究者による5つの論文から成り、各論文はすべて4節から論じられるという整然たる統一感のもと編集されている。松岡氏が特別寄稿を依頼したピエール・クスティヤス氏、ジェイコブ・コールグ氏、パウア・ポストマス氏、小池滋氏、富山太佳夫氏、グレアム・ロー氏のほか、ヴィクトリア朝研究の第一線で活躍している研究者がそれぞれの専門を生かしたテーマで論を展開している。本書は読者個人の研究テーマに応じて必要な部分を独立して活用することも可能であり、また通読した場合でも、専用ウェブ・サイトを通して執筆者全員がお互いの執筆内容を確認できるシステムをとっていたというだけに、内容の重複が避け

られ、かつ同時に、キー・ワードとなるような言葉や事柄には統一がとれている。序章にはギッシング研究の権威であるピエール・クスティヤス氏による「ギッシング小伝」が付されており、ギッシング研究の門外漢であってもこの序章を読むことにより、ギッシング作品を理解する上で鍵となるギッシングの生い立ちや人生経験を一通りインプットしてから本論に臨むことができる構成となっている。

「教育」「宗教」「階級」「貧困」「都市」の5つの章から成る第1部「社会」には、ギッシング個人の‘教育’や‘階級’へのオブセッションや、ギッシング作品に描かれる‘貧困’‘都市’といった、ギッシング作品を理解する上で不可欠な社会的背景知識が凝縮されている。また、‘貧困’を描く上でギッシングが‘宗教’に関わる明確な言説を避けていることを指摘する「宗教」の章では、ギッシングの描く‘貧困小説’を理解する上で重要となる金銭と経済にまつわる事象が詳述されている。

第2部「時代」では、技術や科学の進歩に伴う価値観の変化など、ヴィクトリア朝後期ならではの時代背景が考察の対象となっている。19世紀末の科学をめぐる言説、および世紀末に流布した犯罪学をめぐる言説の中でギッシング作品を読み解いた「科学」および「犯罪」の章、後期ヴィクトリア朝における定期刊行物市場と出版形態の変貌を概観した「出版」の章、先輩作家として最も影響を受けたディケンズとの比較を中心に論じた「影響」の章、ギッシング作品において理想的に描かれている‘地中海世界’と‘南イングランド’の表象を通してギッシング自身の英国人的な気質を検討した「イングリッシュネス」の章から成っている。

第3部「ジェンダー」は、「フェミニズム」の章においては‘新しい女’をめぐる、「セクシュアリティ」の章ではギッシング自身が生み出した言葉である‘性のアナキー’をめぐる、それぞれギッシング作品における女性の問題を考察し、「身体」の章は作品の随所に反映されたギッシングの身体意識を医科学言説との関わりから検証している。「結婚」の章においては、結果として結婚や女性の役割の正当性が揺らぎながらもそれに代わる理想的な形が見出されることのないギッシング作品における結婚観、家庭像が論じられている。「ジェンダー」の最終章では、「女性嫌悪」のタイトルのもと、女性の進出という社会現象を受けて、父権制を批判しつつも

‘女性’に対して旧来的な価値観を捨てきれないでいる男性主人公たちの複雑な心理が分析されている。

第1部から第3部がギッシング作品に反映された社会的・文化的背景を考察するものであるのに対して、第4部は、作家ギッシングという観点から作品を見つめるものである。「自己」「流謫」「紀行」「小説技法」「自伝的要素」の各章において、‘個人主義’を標榜しつつ空洞化の意識に脅かされ続けた作家の‘自己’、ギッシング作品の特徴ともいえる‘エグザイル’意識、紀行文に見られるギッシングにとっての古典の世界、伝統的要素と革新的要素が混在した小説技法、書く自分と書かれる自分の乖離といった事柄が論考の対象となっている。

最後の第5部「思想」は、「リアリズム」「ヒューマニズム」「審美主義」「古典主義」「平和主義」という様々なイデオロギーからギッシングという人間像を考察したものであり、そこからは、芸術、知性といったものに対するギッシングの精神的な思想が読み取れる。

それぞれ異なる研究者によるこれら25本の論文は、全体を通して共通した一つの印象を浮かび上がらせる。「(ロンドンは) 幻滅の都市であると同時にその幻想的な魅力と知的な刺激が彼を引きつけてやまない創作活動の磁場であった」(第5章96頁)、「ギッシングは必ずしも当時の『退化論』に芯から浸っていたわけではないが、少なくとも前向きの『進化』を信じる人ではなかった」(第6章126頁)、「変貌する文学市場とその物語形式への衝撃に対するギッシングの矛盾した反応」(第8章163頁)、「両義的なイングリッシュネス」(第10章190頁)、「(ギッシングは) 多くの公的問題に関して奇妙に相反する態度を示していた」(第15章286頁)、「語り手はどちらにも共感しているように見えながら、結果的には、どちらにも距離を置いているように見える」(第13章252頁)、「イタリアの古い歴史と文化に対する彼自身の両面的な態度」(第18章331頁)など、異なった研究者たちによるこれらの指摘は、どんな事柄に関しても見受けられるギッシング特有の‘両面価値感情’を浮き彫りにし、研究対象としてのギッシングの一筋縄ではいかない魅力を読者に改めて認識させる。「彼は教育、階級、女性、結婚、金銭をはじめとする様々な問題に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していた」(第5章96頁)と松岡氏は述べる。苦学の末オーエン

ズ・カレッジでの授業料免除を受け、古典の大学教授としての将来を期待されていた矢先に、街の女‘ネル’を更生させるためとの信念から窃盗を働き退学処分 / アメリカでの逃亡生活 / ‘ネル’との結婚生活が悲惨な最期を遂げたにもかかわらず、教養があっても金のない男は中産階級の女性と結婚できないという悲観的な自己否定から再度、無教養な女性と結婚 / 自分と知的レベルを共有できる女性への憧れを捨てきれずに妻を見放し中産階級のフランス女性との重婚を決意しフランスで生活 / 郷愁の念にかられながらも故国への帰国を果たすことなく46歳という若さで異邦の地で客死・・・本書を通して伝えられる波瀾に満ちたギッシングの生きざまは、一つの時代を生きた作家の人生模様として、研究者に限らず、一般の人にとっても大いに興味深いものであろう。

また、「文化」と「教養」に対するギッシングの一途なまでの傾倒は本書が全編を通じて読者に与える最大の印象である。松岡氏は「まえがき」において「少子化に苦しむ現在の日本では、生き残りをかける大学の大半が実社会で役立つ人材の育成に重点を置くあまり、実践能力を身につける専門教育を優先して、幅広い視野と複眼的な思考力や判断力を育成する教養教育をなおざりにしている」(v)と述べているが、事実、検定英語対策などのプラクティカルな内容の授業が学生にもてはやされる昨今では、リーディングの授業などでも‘パラグラフ・リーディング’や‘スキム・リーディング’などといったリーディング・スキルを中心とした演習が大学側から求められ、文学的な教材が敬遠されるのが現状であり、大学教育の現場にいる文学研究者の多くが板挟み状態にあると言える。並木幸充氏は、第24章「古典主義」において「ギッシングは・・・古典や教養というものを当時の実利社会、功利的社会から逃れる避難所としてばかりでなく、むしろそうした非人間的社会にこそ必要な精神的支柱のようなものとして作品内に投影しようとした」(441頁)と述べている。ヴィクトリア朝後期という様々に価値観が揺れ動いた時代を生きたギッシングの一徹な‘精神性’、‘教養主義’を、現代の我々は再認識する必要があるであろう。

第2章「宗教」において富山太佳夫氏が「経済基盤の変化に目を向けることをしないヴィクトリア時代の小説の研究には、教養小説論であれ、社会小説論、心理小説論、フェミニズム小説論の何であれ、私には何の関心も

ない」(52頁)と述べているように、文学研究において、とりわけヴィクトリア朝のように様々な事柄が変化を遂げた時代においては、作品を論じる上で社会的、文化的な時代背景にまつわる知識は不可欠となる。その意味においても、本書は貴重な資料であり、多岐にわたる専門分野の研究者たちが本書の恩恵に浴すことであろう。目下、松岡氏のもと、ギヤスケル生誕200年を記念して、今度は‘前期’ヴィクトリア朝の社会と文化を考察する研究書が準備中であると聞いている。本書と併せて、伝統と革新のはざままで揺れ動いたヴィクトリア朝時代を多面的に概観する研究の集大成となることは間違いないであろう。

書 評

岩間俊彦 『イギリス・ミドルクラスの世界
—ハリファクス、1780 - 1850—』
(ミネルヴァ書房、2008年)

光永 雅明

本書は、イギリス社会経済史・都市史等の領域で精力的に研究成果を発表している岩間俊彦氏による初の単著であり、氏がリーズ大学に提出した博士論文に大幅に加筆・修正などを施したものである。

序章（「階級、地域社会、日本における研究」）と1章（「イギリス・ミドルクラス研究の現状と課題」）で示されるように、ハリファクスにおける中産諸階級の歴史を綿密に検討する本書は、R. J. モリスらが切り開いてきた、19世紀の地方都市における中産諸階級の実証的な研究の潮流をくむものである。しかしそのような研究は、対象をきわめて限定することによって「個別事例研究の横暴」を助長する恐れもあると著者は言う。そのため本書では、ハリファクスにおける中産諸階級の「多面的かつ包括的な」把握が試みられる。より具体的には、1780年から1850年にかけてのハリファクスにおける中産諸階級を、「経済社会の状況」、「政治的領域」、「公共制度」の三つの側面 (p.20) から包括的に分析することが、本書の基本的な狙いだと言えよう。同時に、18世紀における中産諸階級の形成に関心が寄せられている近年の研究動向にも留意して、18世紀末から19世紀半ばの時期におけるハリファクスの中産諸階級の歴史的特質を明らかにすることも、本書の課題のひとつとされている。

中産諸階級の「多面的かつ包括的な」把握に取り組み、その「複雑性や多様性」を強調する本書であるだけに、そこで扱われる題材や、展開される議論は多岐にわたる。評者の能力上の問題のために、本書評は、その豊かな成果のごく一部にしか触れられないことをお断りしなければならない

(なお本書は「中産諸階級」と「ミドルクラス」を厳密には区別して用いているが、本書評では残念ながらこの点に踏み込む余裕もない)。

さて、本書の史料面で注目すべきなのは、ハリファクスの選挙人名簿や商工人名録などをもとにして著者が作成したコンピューター・データベースを本格的に用いていることであろう。投票行動の詳細な解明など、データベースを用いた分析(とくに複数のデータベースの結合)によって得られた成果はきわめて大きい。しかも本書は、データベースと、同時代の新聞や公文書などの質的な史料(これも膨大な量に上る)とを相互参照しつつ分析を進めている。史料上、きわめて堅牢な著作と言えよう。歴史データベースを主題とする1章が補論として設けられていることも、読者にとってきわめて有益である。

具体的な内容に移ろう。まず中産諸階級の「経済社会の状況」は、2章(「地域社会と制度」)を中心にして分析される。著者によれば、人口の急増を背景にして、1780年以降のハリファクスの産業は急速に発展する。繊維産業は確かに地域の基軸産業であり(とくに雇用面において)、その工場制も1850年代までには確立してゆく。しかし同時に、ハリファクスの産業構造や職業構造は多様化もしており、中産諸階級内における経済的な地位や利害は大きな相違を抱え込んでいた。

また本書の随所では、中産諸階級が宗派においても、党派(主要なものとして、トーリー、ホイッグ/リベラル、急進派)においても多様であったことが強調される。では様々な対立の芽を抱えていたとも言える中産諸階級はいかにして「相互に関連づけられていた」(pp. 17-18)のだろうか? この問いに答えることになるのが、「政治的領域」や「公共制度」の分析である。

政治的領域における中産諸階級の活動は3章(「地域社会における公共制度と政治」と4章(「政治とミドルクラス」)で綿密に分析される。それによれば、1780年以降、中産諸階級は、地域政治への参加を強めるとともに、階級内における深刻な政治的対立(たとえば商人・製造業者と、織元・職工との対立)を経験し、さらには、19世紀前半を通じて、チャーティズムなど労働者階級を中心とした民衆政治からの圧力に直面していた。

しかしこの不安定な状況は1850年代初頭までに変化することになる。そ

の大きな背景は、第一次選挙法改正によりハリファックスが2名の下院議員を選出する議会バラになったことである。主要な3党派が2議席を争う選挙戦は熾烈であったが、同時に党派間での複雑な協力関係も選挙ごとに生み出した。すなわち3派は、地域の様々な集団・利害・運動などに対応しつつ「党派の戦略や協力関係を形成」した (p.142) のである。中産諸階級が地域社会の中で様々な政治的組織を成長させ、これらの組織間の相互関係を築き上げていったことを著者は重視していると言えよう。さらにハリファックスにおける選挙結果も安定してゆく。転機となったのは1852年のバラ選挙であった。この時期までには、「自由主義」や「階級間の調和」などのイデオロギーがハリファックスの選挙区に浸透し、その結果、同年の選挙でチャーティストの候補（アーネスト・ジョーンズ）は惨敗し、同年から1867年にいたるまでホイッグ／リベラルの候補が継続的に議席を得るようになる。以上のように、中産諸階級の党派や宗派による政治的活動や関係、さらには自由主義などのイデオロギーが、中産諸階級の「多様化した政治的利害を処理する」ことに貢献したのである (p.264)。

次に3章と5章（「公共制度とミドルクラス」）では、公共制度（主としてはヴォランティア・ソサエティと地方行政団体）の統治と中産諸階級との関係が詳細に分析される。本書によれば、1780年以前と比べると、公共制度を構成する組織の数は急増し、公共制度と中産諸階級との関係はますます緊密となった。すなわち中産諸階級は公共制度を資金や運営面で大きく支えたとともに、「自由主義」、「社会的改良」、「階級間の調和のとれた社会」といった自らのイデオロギーにもとづいてこれらの制度を統治した。同時に中産諸階級は、公共制度への参加が制限されていた労働者階級と自らを区別し、公共制度に多額の財政的支援を行う上層中産諸階級を頂点とする中産諸階級内の階層秩序を強化し、このような制度は政治的・宗教的に「中立」であるべきだという規定を策定・運用することにより、公共制度内における政治的・宗教的な利害の対立を最小限に抑えこんでいったのである。様々な多様性をかかえていた中産諸階級がある種の一体性を高めてゆく上で、公共制度（なかでもヴォランティア・ソサエティ）が果たした役割を重視する議論だと言えよう。

なお本書は、中産諸階級の中でも巨大な製造業者の影響力や権威が地域

で高まってゆくことを指摘している。すなわち彼らは、地域の党派政治における影響力を強めるとともに、その一部は1850年代以降、下院議員となった（4章）。彼らは公共制度に対し莫大な資金援助を行うとともに、都市公園の整備なども進め、彼らが公共制度において指導力を発揮しているとの認識を地域社会に定着させたのである（5章）。

以上のような本書の議論はきわめて綿密になされており、とくに中産諸階級の産業・職業構造、投票行動、公共制度への具体的な関与についての分析は、膨大な史料的根拠にも支えられ、高い説得力を持つ。本書評では十分に触れられなかったが、経済・政治・社会という三つの領域が、相互参照されつつ分析されていることも強調しておきたい。中産諸階級の世界を「多面的かつ包括的」に把握し、19世紀におけるハリファクスの中産諸階級の新しい展開を示すという課題は、十分に達成されていると言えよう。

本書で明らかにされた内容が、19世紀半ば以降のイギリス社会を理解する上で大きな意味を持つことも、終章（「ミドルクラスの世界」）の第2節（「ミドルクラスの世界からの展望」）で示される。とくに地方の商工業都市における公共生活ないし公共制度の発展、あるいはこれらの都市における経済・政治・社会の「制度的基盤」といった観点から、19世紀前半の中産諸階級が果たした役割の大きさが示され、大変興味深い。また、評者の不確かな感想でしかないが、19世紀後半における全国的なレベルでの具体的な政治的動向（たとえば労働者への参政権の拡大、リブ＝ラブ路線の開始など）を照射する可能性も、本書で明らかにされた事柄（たとえば製造業者による階級調和への志向性）は秘めているように思われた。

以上のように本書は、膨大な史料の系統的で綿密な分析に裏打ちされた、きわめて堅牢な個別研究であり、またそれゆえに、19世紀やヴィクトリア時代のイギリス社会を考察してゆく確固たる展望も読者に与えてくれる。当時のエリートとしては土地貴族やシティの金融・サービス業者らもよく知られているが、彼らとはまた違った方法で、地方都市における中産諸階級の人々がイギリス社会の大きな変貌に関与したことを本書は説得的に物語っている。都市史や中産諸階級史の専門家は無論、広くヴィクトリア時代に関心をもつ人すべてに、本書の一読を勧めたい。

書 評

レイ・ストレイチー 著
 出淵敬子、栗栖美知子 監訳
 『イギリス女性運動史 1792－1928』
 (みすず書房、2008年)

武田 美保子

このたび英国における女性解放運動の130余年にわたる歴史を辿ったレイ・ストレイチーの『イギリス女性運動史1792-1928』の邦訳が出版された。英国女性解放運動の「古典」である本書が出版されたのが1928年のことであるから、遅すぎる出版というべきだろうか。ただ、だからといって本書の価値がそれだけ減じるわけではない。訳者あとがきにもあるように、英国の歴史書において「通史」が少ないなか、英国女性解放運動の数少ない貴重な「通史」である本書が翻訳出版されたことの意義は決して小さくはない。実際筆者にとっても、ここで扱われている歴史的事実や歴史的登場人物をめぐるエピソードなどのなかには周知のものも多くあったが、解放運動のさまざまな局面を年代ごとに追った本書が示してくれる、パノラマのような史的空間図には感銘を受けた。だから本書の最大の眼目は、メアリー・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』刊行の1792年を起点に、英国で初めて男女平等の普通選挙権が認められた1928年までの長いスパンの女性解放史がひも解かれていることである。

レイは「序」において、本書を書く難しさは、資料が不足していたことではなく、互いに重なり合う出来事についての「過剰なまでの証拠と材料」を解きほぐし、相互の影響関係を示すことであつたと述べているが、一見断片的に見える記録の集積からは、その格闘のあとが浮かび上がってくる。そして特に本書の後半では、確かにいくつかの出来事が互いに呼応し合い大きな奔流を成していくさまを感得することができた。こうした流れの中では、登場する女性のひとりひとりがそれぞれに重要な位置を占めており、

その力の結集なしには、女性たちの解放もまたありえなかったことを改めて認識させられた。ちなみに著者レイ・ストレイチーは、ブルームズベリー・グループのひとりでもあったリットン・ストレイチーの兄オリヴァー・ストレイチーにみずからプロポーズして結婚し、女性参政権運動の精力的な活動家ともなった「新しい女」と呼ぶにふさわしい人物で、とりわけ参政権運動の具体的な描写には、渦中に生きる著者自身の視点が生かされている。レイのそのアプローチゆえ、階級的には中産階級に限られてはいるものの、本書には必然的に非常に多くの女性人物が登場する。それゆえ、本書の趣旨を生かすためにはできるだけ多くの人物たちに言及すべきかもしれないが、ここでは紙面の関係で、こうした流れのなかでもとりわけ運動の勢いを促したと思われる、特に印象深い登場人物や出来事をいくつかとりあげることで紹介に代えることにしたい。

まず最初は、ヴィクトリア女王とほぼ同時代に生き、看護学校設立に尽力したフローレンス・ナイチンゲール。良家の子女として生まれ、「家庭という牢獄」に捕らわれながら、世の中の役にたち、神と人類のために捧げたいという若いころからの野望を、30歳を過ぎてから着実に行動に移していき、終には看護婦という女性の職業を確立する礎を築き、クリミア戦争で国に貢献するという大事業を果すに至るその生涯は比較的良好に知られているが、彼女自身は女性解放運動に「多くを期待していなかった」し、意志薄弱な多くの女性たちには侮蔑の念を抱き続けたという記述は、同時代の女性たちが置かれていた状況がどのようなものであったかを窺い知るうえで興味深い。

その悲劇的な生涯よって本書中最も胸を衝かれる思いがしたのは、1839年の「未成年者保護法」の制定実現に尽力したキャロライン・ノートンである。その美貌と才気で社交界を魅了した彼女だが、その夫婦関係は決定的に破綻し、夫は彼女のもとから3人の子どもたちを連れ出して彼女に会わせないようにしてしまう。彼女を支持する弁護士たちの助けや、自身の筆によるパンフレットの訴えによって、母と子どもにかかわる法律制定の突破口を作ることに成功するのだが、子供たちの死によって結局彼女自身はこの法案の恩恵を受けることはなかった。しかしながら法案可決以降の政治家たちの女性の社会的地位への関心の高まりが、「婚姻及び離婚法」通過

を可能にするという形で彼女の努力は報われるのである。面白いのは、同時期に起こった世界奴隷制度廃止大会のロンドンにおける開催の際の、女性の社会的地位をめぐる英米事情の違いで、会議の代表団7人のうち女性が4人のアメリカに対して、女性の参加を認めないイギリスは彼女たちを締め出してしまうというエピソードは、米国の新しさと英国の旧弊性をくつきりと浮き彫りにしてくれる。

本書では、当然男性たちによる援護射撃についても触れられている。女性が社会的存在であることを信じて労働条件改善に尽力したフレデリック・モーリスは、ジェントル・ウーマンに唯一開かれていたガヴァネス職に就く多くの女性たちが、訓練不足のために苦悩する姿をみて、彼女たちを抜本的に支援するべく教育推進の必要性を説き、コレッジ開設への道を開く。男性の支援者としてさらに忘れてはならないのが、『女性の隷属』を著し、国会議員として女性参政権運動を大きく前進させることになるジョン・スチュアート・ミルである。女性運動をきわめて身近な問題として捉えている人物としてその影響力は計り知れず、権利獲得に至る前の彼の早すぎる死は、運動にとっての大きな損失となる。こうした男性たちが解放運動の中で果たした役割についてもきちんと書きこまれているのが、歴史的記述である本書の強みでもある。

50年代から60年代において女性の社会進出が進むのは、社会運動に関わる推進派だけでなく、活力にあふれた中産階級の女性たちの慈善運動を介しての貢献という側面も大きかったという指摘も、英国の女性解放史の特性を知るうえで重要である。救貧院改革の創始者ルイーザ・トワイニング、巨額の遺産を運動に投じたミス・アンジェラ・バーディット、「既婚女性財産法案」の請願書提出に関わったバーバラ・リー・スミスなどを始め、その顔ぶれは多彩である。結婚しない「余った女性」をめぐる議論が世論に注目されるに従って、雇用問題への取り組みなど、解放に向けて運動が益々盛り上がりを見せることになるという流れは、現在では良く知られた事実だろう。

加速度的に膨れ上がる多くの人々が錯綜しながら登場する、本書の後半部分で紹介されている19世紀後半以降の出来事を概括すれば、女性解放運動は具体的には、女子教育制度の確立、性の二重基準の是正、雇用機会拡

大、そしてとりわけ女性参政権獲得といった問題をめぐって、さらに激しい展開をみせることになる。まず女子教育運動に向けた組織的活動は、クイーンズ・コレッジとベッドフォード・コレッジの設立運動に端を発する。コレッジの初期の卒業生たち、フランシス・メアリー・バスやドロシア・ピールなどは、教師として女子中等教育学校の運営に乗り出すが、女子教育に対する根強い偏見や妨害に苦闘を強いられる。一方、正式な大学教育を受けるべくケンブリッジ大学への入学を願い出た女子学生たちの熱意が、きわめて排他的な大学評議会を動かし、ガートン・コレッジやニューナム・コレッジ設立、3人の女学生による正式の卒業試験合格に至る軌跡は、感動的ではある。最終的には全面的に門戸が開かれることになるにせよ、当初医学を志す女性たちが入学を許されたエディンバラ大学では、男子学生たちから(今となっては滑稽といえるほどの)ひどいやがらせを受け、学位を与えることを拒否されてしまうなど、その偏見の根強さにはただただ驚くばかりである。(ついでながら、こうしたエピソードは『コナン・ドイル事件簿』というBBC制作のDVDでも見ることができる。)

性の二重基準に対する闘いについては、女性にのみ性病の検査を強いる「性病予防法」という悪法の廃止に尽力したジョセフィン・バトラーがよく知られている。が、彼女の人間のかつ外見的な魅力が多くの人々を啓発するに至ったこと、また男女間の賃金差が、低賃金の女性の雇用拡大を促したことで男性の雇用を脅かすことになり、あらゆる職種において男性の敵意が女性に向けられるなどの状況報告は、こうした事柄がきわめて今日的な問題でもあることを浮き彫りにしてくれる。

最後に、本書のハイライトともいべき女性参政権運動にふれておきたい。女性参政権のための法案通過が妨害されて以降、女性参政権運動家たちは方針をめぐって分裂し、フォーセット夫人を会長とする穏健派の「女性参政権協会全国連合」と、戦闘的かつ過激な運動を展開するパンクハースト夫人とその娘クリスタベル率いる「女性社会政治連合」という二つの連合体とが設立されるに至る。過激派たちは故意に警察に尾行される反逆者として、議会を「襲撃」し、投獄されるとハンガーストライキを行うなど、その運動は熱狂的なまでに盛り上がるのだが、その運動のあまりの過激さが人々の反感を買い、かえって法の成立を遅らせてしまう結果になる。

そのあたりの、糸がもつれ絡まりあうような描写はきわめて臨場感に富んでいる。それゆえ、もつれた糸がほぐれ、条件付ながら女性参政権が認められるためには、第一次世界大戦中の男性不在時に女性たちが社会を支えたことが評価されるという、歴史的な出来事を待たなくてはならなかったという事情もかなり理解できた気がした。ただこうした流れを追っていくと、英国の女性解放運動があれほど過激になり、結果的にその解放が英連邦の進歩的な国々と比べてかなり遅れをとることになったのは、やはり英国の因襲性が大きく関わっていると感じないではいられない。いずれにしろ本書は、煩雑ともいえるほどの詳細な記述を忍耐強く追っていくことで、事実が持つ手ごたえと重みを確実に感受できる一冊として、若い人たちに特に一読を促したい書物である。

Helens and Jocastas: 'Angels' in *Pendennis* and *Henry Esmond*

UNUKI Ryo

Helen Pendennis and Laura Bell in *Pendennis* (1848-50) and Rachel Castlewood in *Henry Esmond* (1852) are not as 'pure' or 'angelic' as they seem. For instance, Laura's rage against Pen's intention to marry an actress reveals her class-consciousness and jealousy. Class-consciousness implies that 'angels' are not the mere antithesis of 'snobs'. The trait of jealousy reveals that 'angels' possess 'sexuality'.

Interestingly, the characters' names and their related metaphors allude to well-known sexually sinful wives/mothers, such as Helen, Jocasta and Gertrude. Sexually repressed, they internalise society's domestic ideology, which, combined with intense 'jealousy', makes them terribly possessive of the men they love and severely cruel to others.

These descriptions derive from Thackeray's perceptions of the women around him, as well as from his knowledge of early feminist writings. He regarded a woman not as 'an angel' but just as 'a woman'.

Thackeray reveals that ideological repression enslaves not only women but men as well. To put it metaphorically, Helen Pendennis, after losing her flesh and sexuality by her death, becomes 'pure' domestic ideology itself. Rachel Castlewood, continuing to live, remains quite jealous and possessive after her remarriage to Henry. A bare possibility for human beings to be released from ideological 'slavery' is suggested by Laura: she finally recognises her own weaknesses and becomes generous towards other people. In *Henry Esmond*, the 'choice of Hercules' between 'angelic' Rachel and 'worldly' Beatrix, who can be considered 'a woman' split ideologically into an 'angel' and a 'whore', never leads Henry to a truly happy life.

Aubrey Beardsley's *Bon-Mots* Vignettes: their significance in the development of his style

Akiko Shimoda

This paper deals with Beardsley's vignettes for *Bon-Mots* (1893), the three-volume anthology of witticisms compiled from various authors by W. Jerrold. Between two of his masterpieces, Malory's *Le Morte d'Arthur* (1892-4) and Wilde's *Salomé* (1893-4), *Bon-Mots* has been neglected by art historians. The over one hundred vignettes, however, had a special significance in the development of Beardsley's idiosyncratic style of drawing.

The publisher gave the work as a little diversion to Beardsley, who became weary of toiling at his first major commission, the illustrations for *Le Morte d'Arthur*. While he had to follow the text and imitate the style of wood-engraving in his drawings for the Malory, he was free from these restraints with the *Bon-Mots* vignettes. He could draw anything he liked, regardless of the text, and the small scale of a vignette allowed him to explore various possibilities of line drawing. Some novel characteristics of his lines noticeable in the illustrations for *Salomé* first appeared in these light-hearted vignettes.

Beardsley mentioned his keen interest in 'the subject of lines and line drawing' in a letter written in 1891. At about the same time he also expressed his agreement with Walter Crane's view of line drawing published in the *Magazine of Art*. It is true that Beardsley's interest in line as the essential element in artistic creation was shared by Crane and many other contemporary illustrators. But while Crane emphasized the importance of using different lines in accordance with the different character of each object, Beardsley as the illustrator of *Bon-Mots* pursued abstract beauty and effects of lines themselves, often ignoring the logic of representation. Though he could draw in the traditional style if he intended to, Beardsley selected and further refined this simplified-line style in his later works, in part strategically, to shock and impress the public with its utter newness.